

有田・小田部35

第182次・186次・187次・190次・192次・193次

弥生時代初頭の環濠・奈良時代前半の早良郡衙・
戦国時代の城址に関する遺構を中心とする報告

2000

福岡市教育委員会

有田・小田部35

第182次・186次・187次・190次・192次・193次

弥生時代初頭の環濠・奈良時代前半の早良郡衙・
戦国時代の城址に関する遺構を中心とする報告



序

福岡市の西部に広がる早良平野は、地下鉄開通以来開発が途切れることなく続
き、昔年の情景は一変してしまいました。今回報告する有田遺跡がある有田・小
田部・南庄一帯もほとんど宅地化してしまい、昭和53年の第3次調査以来継続し
てきた調査も、今年で196次を数えるに至りました。

この間、昭和42年に行われた第1次調査で発見された弥生時代の環溝の他、各
時代の重要な遺構・遺物が発見されました。その一つの到達点が昨年度の第189
次調査で発見された奈良時代の郡庁でしょう。今回報告する調査はこの郡庁に伴
う郡衙の一部を始め、各時代の重要な遺構群です。調査はいずれも個人の専用住
宅建設に伴う調査で、調査に御協力を賜った地権者の方々には心からお礼を申し
上げるとともに、本書が広く活用されることを願っています。

平成12年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西 憲一郎

例　　言

- 1 本書は福岡市教育委員会が専用住宅等の建設に伴い、早良区有田地内において国庫補助金で発掘調査を実施した、第182次・第186次・第187次・第190次・第192次・第193次調査の報告書である。
- 2 本書に掲載した遺構実測図の作成は下記の者が行った。

第182次　長家　伸	第186次　米倉秀紀・宮原邦江
第187次　米倉・星野恵美・清原ユリ子・金子山利子	第190次　本田浩二郎
第192次・第193次　藏富士寛	
- 3 本書に掲載した遺物実測図の作成は下記の者が行った。

第182次　長家・林田憲三	第186次　米倉・平川敬治
第187次　米倉	第190次　米倉・藏富士
第192次　藏富士	
- 4 本書に掲載した遺構の写真撮影は下記の者が行った。

第182次　長家	第186次　米倉
第187次　米倉・星野	第190次　本田
第192次・第193次　藏富士	
- 5 本書に掲載した遺物の撮影は下記の者が行った。

第187次・第190次　米倉	
----------------	--
- 6 本書に掲載した図の製図は下記の者が行った。

第182次　長家・阿部泰之	第186次・第187次・第190次　米倉・大庭洋子
第192次・第193次　藏富士	
- 7 本書の遺構配図に使用した座標は国土調査方第II座表系に拠っている。
- 8 本書で用いた方位は磁北である。
- 9 遺構・遺物番号は各調査区ごとの通し番号とした。
- 10 本書に関する記録及び遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。
- 11 本書の編集は、長家・藏富士の協力を得て、米倉が行った。
- 12 本書の執筆は下記のとおりである。

I・III・IV・V　米倉　　II　長家　　VI・VII　藏富士

本文目次

I	はじめに	1
II	第182次調査	3
1	調査に至る経過	3
2	調査の記録	3
(1)	調査の概要	3
(2)	遺構と遺物	3
III	第186次調査	11
1	調査区の位置と周辺の調査	11
2	調査の記録	11
(1)	調査の概要	11
(2)	遺構と遺物	11
3	まとめ	15
IV	第187次調査	16
1	調査区の位置と周辺の調査	16
2	調査の記録	16
(1)	調査の概要	16
(2)	遺構と遺物	16
3	まとめ	30
V	第190次調査	36
1	調査区の位置と周辺の調査	36
2	調査の記録	36
(1)	調査の概要	36
(2)	遺構と遺物	36
3	まとめ	37
VI	第192次調査	39
1	調査区の位置と周辺の調査	39
2	調査の記録	39
(1)	調査の概要	39
(2)	遺構と遺物	40
3	まとめ	41
VII	第193次調査	42
1	調査区の位置と周辺の調査	42
2	調査の記録	42

挿図目次

第1図 有田遺跡の位置と調査地点	2
第2図 第182次調査区位置図	4
第3図 第182次調査遺構配置図	5
第4図 遺構実測図	6
第5図 出土遺物実測図1	7
第6図 SD01配置図及び断面図	9
第7図 出土遺物実測図2	10
第8図 第186次調査周辺遺構配置図	12
第9図 第186次調査土坑実測図	13
第10図 第186次調査出土遺物実測図	14
第11図 第187次調査周辺主要遺構配置図	17
第12図 第187次調査遺構配置図	18
第13図 SC05及び同出土・遺物実測図	19
第14図 SC10・SK02実測図	20
第15図 橋・掘立柱建物及び同出土・遺物実測図	21
第16図 SD01土層断面図	22
第17図 SD01出土・遺物実測図	23
第18図 SD03・06土層断面図	25
第19図 SD03出土・遺物実測図1	26
第20図 SD03出土・遺物実測図2	27
第21図 SD03出土・遺物実測図3	28
第22図 SD06・ピット出土・遺物実測図	29
第23図 早良郡衙関連遺構配置図	31
第24図 早良郡衙関連C1・C2群遺構配置図	32
第25図 早良郡衙関連D群・東方建物群遺構配置図	33
第26図 第190次調査遺構配図	36
第27図 第190次調査区東壁土層断面図	37
第28図 第190次調査出土・遺物実測図	38
第29図 第192次調査周辺遺構配置図	39
第30図 第192次調査遺構配置図	40
第31図 第192次調査出土・遺物	41
第32図 第193次調査位置図	42
第33図 第193次調査遺構配置図	42

図版目次

- 図版 1 1 第182次調査北半全景（南から）
2 第182次調査北半全景（北から）
- 図版 2 1 SK01（北から）
2 SE01（北から）
3 SD01Eトレンド（南から）
- 図版 3 1 第186次調査全景（北東から）
2 調査区南西側
3 調査区北東側
4 SK011
5 調査区南東側
- 図版 4 1 第187次調査区北半全景
2 第187次調査区南半全景
- 図版 5 1 SC05
2 SC05遺物出土状況
3 SC05遺物出土状況
4 SC09
5 SK02
- 図版 6 1 SA05
2 SA05柱穴
3 SA05柱穴
4 SB07
- 図版 7 1 SB11
2 SB11柱穴
3 SB11柱穴
4 SD01
5 SD01上層
- 図版 8 1 SD03・06
2 SD03土層
3 SD03遺物出土状況
4 SD03・06
5 SD06七層
- 図版 9 SD01出土遺物
- 図版10 SD01・03・06出土遺物
- 図版11 1 第190次調査全景
2 SD01遺物出土状況
3 SD01・02上層断面
4 遺物15
5 遺物14
- 図版12 1 第192次調査SD01（南より）
2 第192次調査SD02（北より）
3 第192次調査全景（南より）
4 第193次調査全景（南東より）

I はじめに

福岡市の西部に広がる有田遺跡は、旧石器時代から現代まで連続と続く大遺跡である。福岡市教育委員会は有田遺跡を市内重要遺跡と位置付け、遺跡内のすべての開発をチェックし、必要な場合には発掘調査を実施しているが、1999年度でのその数は196次を数える。今回報告する調査も、これらの一貫として行ってきた調査で、その原因は専用住宅及び共同住宅建設に伴うもので、国庫補助金による調査である。今回報告する調査は下記のとおりである。

次数	所在地	調査番号	申請面積	調査面積	調査期間	担当者
第182次	早良区有田1丁目10番4	1111	567m ²	351m ²	960801~960812	長家伸
第186次	早良区小田部3丁目285他	9721	964m ²	252m ²	970607~970704	米倉秀紀
第187次	早良区有田2丁目12-5	9727	568m ²	494m ²	970724~970905	米倉・星野恵美
第190次	早良区有田1丁目10-7	9832	964m ²	27m ²	980824~980827	米倉・本田浩二郎
第192次	早良区有田2丁目13-3	9914	137m ²	73m ²	990510~990519	米倉・藏富士寛
第193次	早良区小田部1丁目393	9924	266m ²	9m ²	990614~990616	米倉・藏富士寛

調査体制（教育委員会文化財部埋蔵文化財課）

1996年度（第182次）

埋蔵文化財課長 荒巻輝勝 第1係長 横山邦維

調査庶務 文化財整備課 谷口真由美

調査担当 第2係 長家伸

1997年度（第186次・第187次）

埋蔵文化財課長 荒巻輝勝 第1係長 二宮忠司

調査庶務 文化財整備課 木原淳二

調査担当 第1係 米倉秀紀（第186次・第187次）、星野恵美（第187次）

1998年度（第190次）

埋蔵文化財課長 柳田純孝 調査第1係長 二宮忠司

調査庶務 文化財整備課 木原淳二

調査担当 調査第1係 米倉秀紀、調査第2係 本田浩二郎

1999年度（第192次・第193次・整理・報告）

埋蔵文化財課長 山崎純男 調査第1係長 山口譲治

調査庶務 文化財整備課 宮川英彦

調査第1係 米倉・藏富士

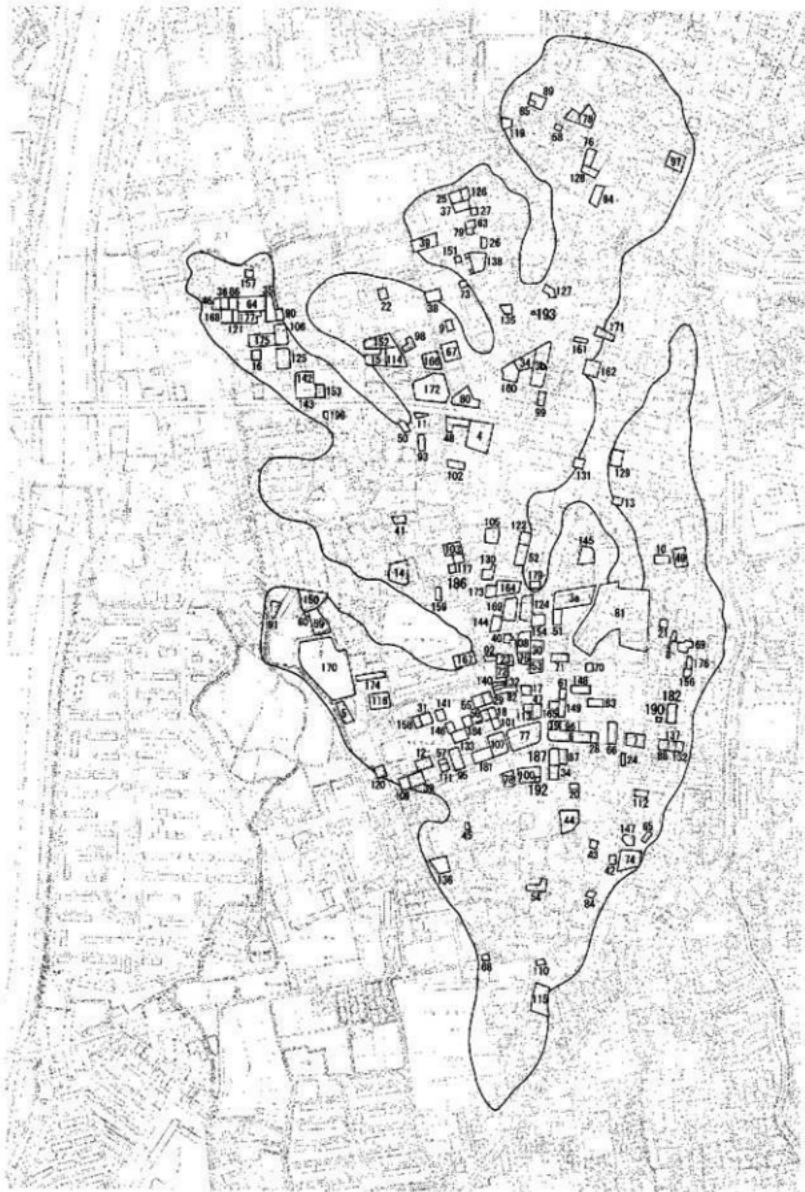
なお遺跡の位置・立地・周辺の遺跡等は他の有田遺跡の報告書を参考願いたい。また1997年度までに既刊の有田遺跡の報告書は「有田・小田部31」（1998）に一覧が掲載されている。それ以降の報告書は下記のとおりである。

「有田・小田部32」（1999）

「有田・小田部33」（2000）

「有田・小田部34」（2000）

「有田・小田部35」（本書）



第1図 有田遺跡の位置と調査地点 (1/8000)

II 第182次調査

1 調査に至る経過

平成8年6月19日付けで渡辺弘子氏より福岡市教育委員会宛に早良区有田1丁目10番4の物件(567m²)に関しての専用住宅建設に伴う埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。(事前審査番号8-2-138)。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である有田遺跡群(分布地図番号82-0309、遺跡略号ART)に含まれており、180次を越える調査を行っている地域である。このため埋蔵文化財課では遺構確認のための試掘調査を平成8年6月25日に行い、表土直下のローム層上面で遺構を確認した。この結果を基に申請者に対して遺構が存在する旨を回答し、その取扱について両者で協議を行った。この結果申請地全体で地下げを行なうため遺構の破壊が避けられることから、発掘調査を行い記録保存を図ることとした。なお調査原因が専用住宅建設によるため調査・整理費用に関しては国庫補助金を充てることとなった。

発掘調査は平成8年8月1日～平成8年8月12日の期間で行った(調査番号9625 略号ART-182)。調査対象地は567m²で、調査面積は351m²である。また遺物はコンテナ2箱出土している。

現地での発掘調査に当たっては、申請者である渡辺弘子様を始めとして下記の関係者の皆様にはご理解を得ると共に多大なご協力を賜りました、ここに記して謝意を表します。

事業主体 渡辺弘子

調査作業 栗木和子 江節子 三谷朗子 徳永洋二郎 鳥井原良治 原美晴 舟越恒人

整理作業 堀本蔵四郎 横尾泰広 吉川順岳 松本ミツ子 坂本ハツ子 加島定次郎

2 調査の記録

(1) 調査の概要

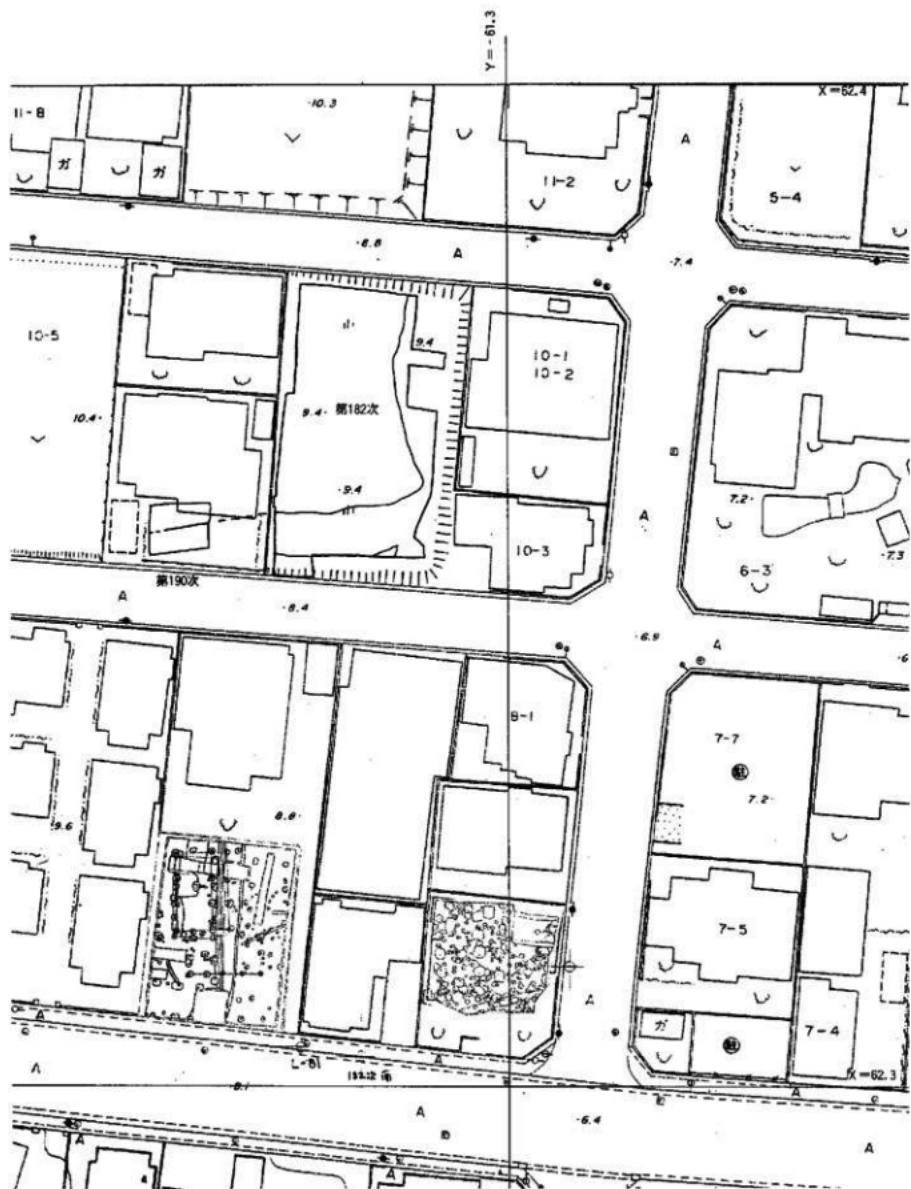
申請地は有田遺跡群の中央部東側端部近くにあたり、調査前は畠地で周囲より高くなってしまっており標高約9.5mを測る。申請地周辺の道路を見ると東側に向かって傾斜しており、台地が金觸川に向かって落ち込んでいく状況が想定できる。調査は重機による表土除去から開始した。なお調査区内で土砂を反転する必要性からまず北半部分の調査を行い、北半部調査終了後引き続き反転し南半部分の調査を行うこととした。遺構は耕作土除去した直下のローム層上面で検出した。遺構面のローム層は鳥栖ローム層の最下位～八女粘土層が露出する部分があり、削平が大きかったこととあわせ洪積台地の縁辺部分に近いことを窺わせる。遺構面標高は西側で9.3m、東端で9.1mを測り、緩やかに東側に傾斜しているが全体にはほぼ平坦である。検出遺構は井戸・上坑・溝・ピットである。遺構のあり方は散漫で遺物量も比較的少ない。

(2) 遺構と遺物

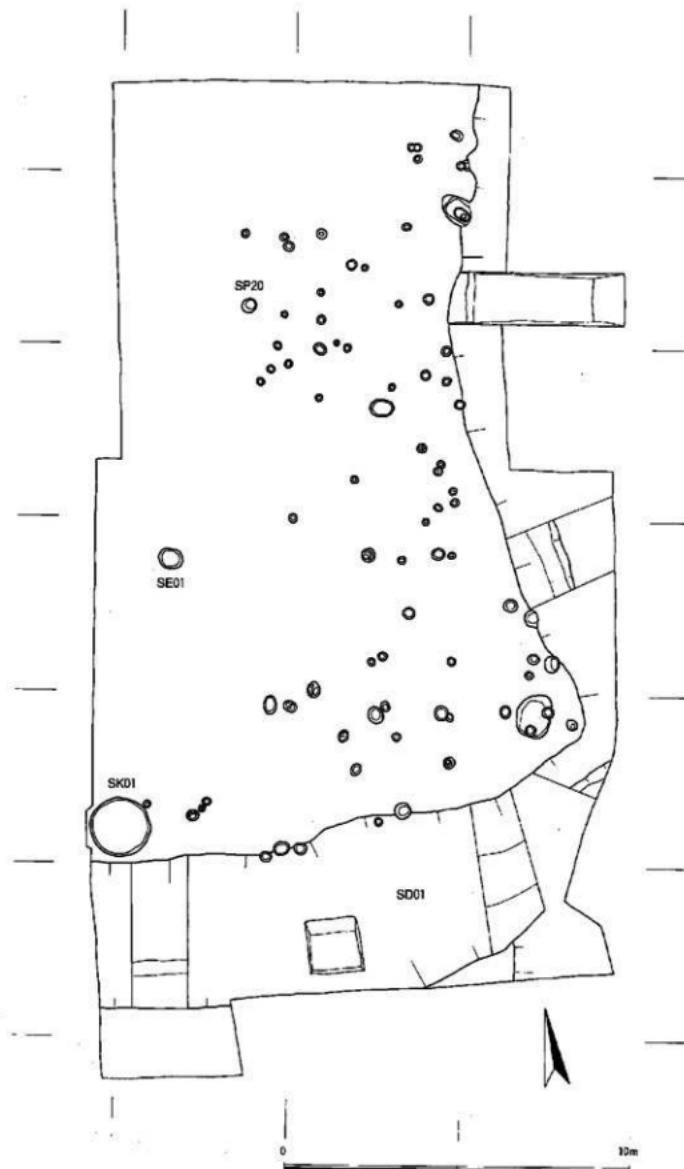
井戸 (SE)

SE01 (第4図)

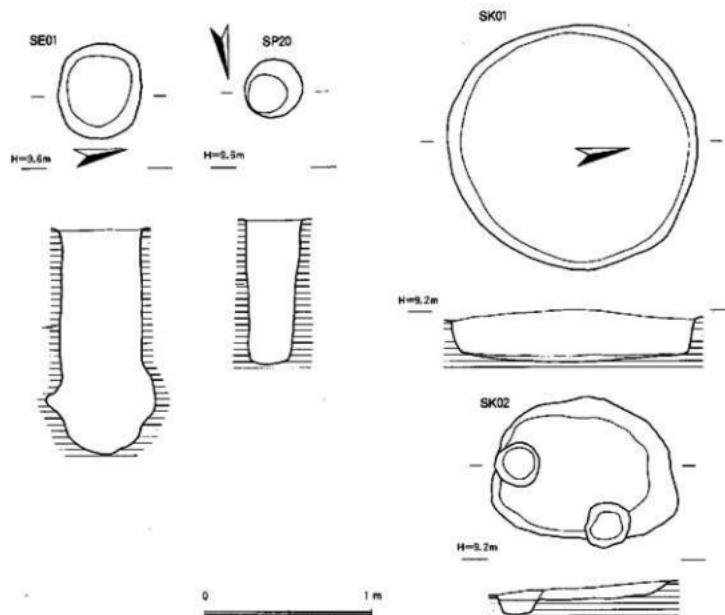
調査区中央西側で検出する。平面は長円形を呈し、長径70cm、短径60cmである。深さは1.6mで、壁は真っ直ぐに掘削されているが、検出手から1.2mの部分を中心に壁が僅かに抉れている。また埋



第2図 第182次調査区位置図（1/500）



第3図 第182次調査遺構配置図 (1/100)



第4図 遺構実測図（1/30）

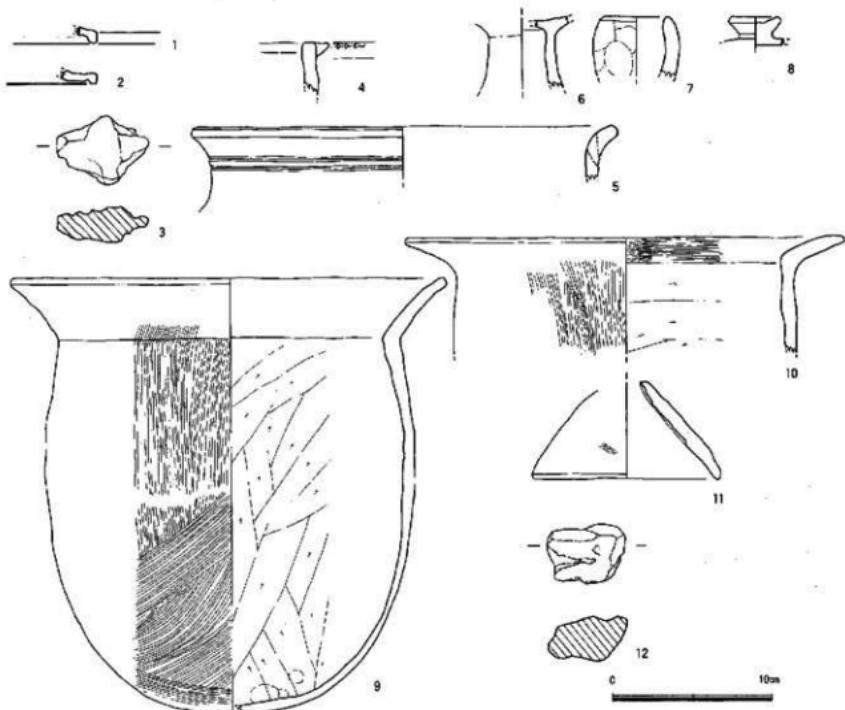
土は検出面から40cmが黒褐色土でその下位には整体状の焼土・炭化物が少量含まれる。それ以下は黒色土にロームブロックが混合し、更に底から10cmは灰色の砂質土が堆積する。最下層の砂質土は井戸内水により洗われた土砂が堆積したものと考えられる。出土遺物には土器部・須恵器の小破片、スサの混入した整体破片、鍛冶滓280gが出土している。須恵器壺蓋破片から8世紀代の遺構と考えられる。また少量であるが鍛冶滓及び整体が出土しており、近辺で鍛冶行為が行われていたと考えられる。この時期は調査地西隣部分の台地最高所に官衙状の建物群が展開する時期と重なり、これとの関連で提えることも可能であろう。

出土遺物（第5図1～3） 1・2は須恵器壺蓋の口縁部小破片である。端部はほぼ直角に折り曲げられている。3は小型の楕円形鍛冶滓である。重量48gを測る。平面は逆三角形を呈し最大厚は2cmである。上面には一部暗紫色の基盤が露出するが全体に茶褐色の錆に覆われる。鍛造剥片は認められないが本炭痕が付着している。

土坑（SK）

SK01（第4図）

調査区南西部で検出する。平面は径1.7mの正円形で深さ30～40cmである。壁は直立し底面は中央に向かって緩く窪むがほぼ平坦である。埋土は上層20cm程が黒褐色土とロームブロックの混合土で底から10cmが黒褐色粘質土である。遺物は下層の黒褐色土から小破片が3点出土するのみである。埋土の状況や出土遺物から弥生時代前期の貯蔵穴と考えられる。



第5図 出土遺物実測図1 (1/3)

出土遺物 (第5図4・5)

4は壺の口縁部である。端面を四面く整形し外側にやや高めの三角突帯を貼り付ける。突帯の端面には刻みが施されている。5は壺の口縁部である。淡い橙色を呈し胎土には1~2の石英砂粒を多く含む。また頸部の屈曲部分に粘土帯の接合線が残る。

SK02 (第4図)

調査中央左側で検出する。平面隅丸長方形で法量は $1.3 \times 1\text{m}$ で深さは10cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。埋土は暗褐色上でロームブロックは混入しない。遺物は土器小破片が数点出土するのみである。SK02を切るSP13から須恵器蓋のつまみが出上している。

出土遺物 (第5図6~8)

6・7はSK02出土で8はこれを切るSP13出土遺物である。6は筒状を呈する高坏の筒部である。7は手づくねの椀である。胎土に径2~3mmの石英砂粒を多く含む。8は須恵器のつまみである。高さ1.4cmを測り、中央部は窪む。

ピット (SP)

SP20 (第4図)

削平によりピットの遺存状況は不良で概ね深さ10~20cmに止まっているなかでSP20のみが非常に深くなっている。法量は上面径40cm・底面径30cmで深さ1mである。埋土は上面から40cmまでが黒色土、その下40cmがロームブロックまじりの黒色土、以下底面まで約20cmが汚れた黄白色土(八女粘土)である。汚れた八女粘土の上面から土師器甕が1個体の1/3程度まとまって出土している。その他整体・鍛冶滓が各2点づつ出土している。

出土遺物 (第5図9~12)

9は底から20cm程浮いてまとまって出土した土師器甕である。1/3程の残存であるが口縁部から底部までつながり、不要な破片が殆どないことから、ピット内に投棄された時点で既に1/3程度に分割されていたものであろう。口縁部は横ナア、胴部は外面綿刷毛内面綿~斜めのヘラ削りを行う。外面は頸部以下全面に煤が付着する。胎土には径1mm程度の砂粒及び雲母が多く含まれる。10も甕である。胴部は外面綿刷毛内面横方向のヘラ削り、口縁部内面には横向方向の刷毛目が施される。煤の付着は認められない。胎土は9に似るが雲母は極めて少ない。11は高杯脚部である。2次的に熱を受けしており器面が荒れている。12は鍛冶滓である。平面形は長方形に近く重量は70gである。全面に酸化土が付着し基地の状態は不明瞭である。図示していないがもう1点の滓は10gのガラス質滓の破片である。

溝 (SD)

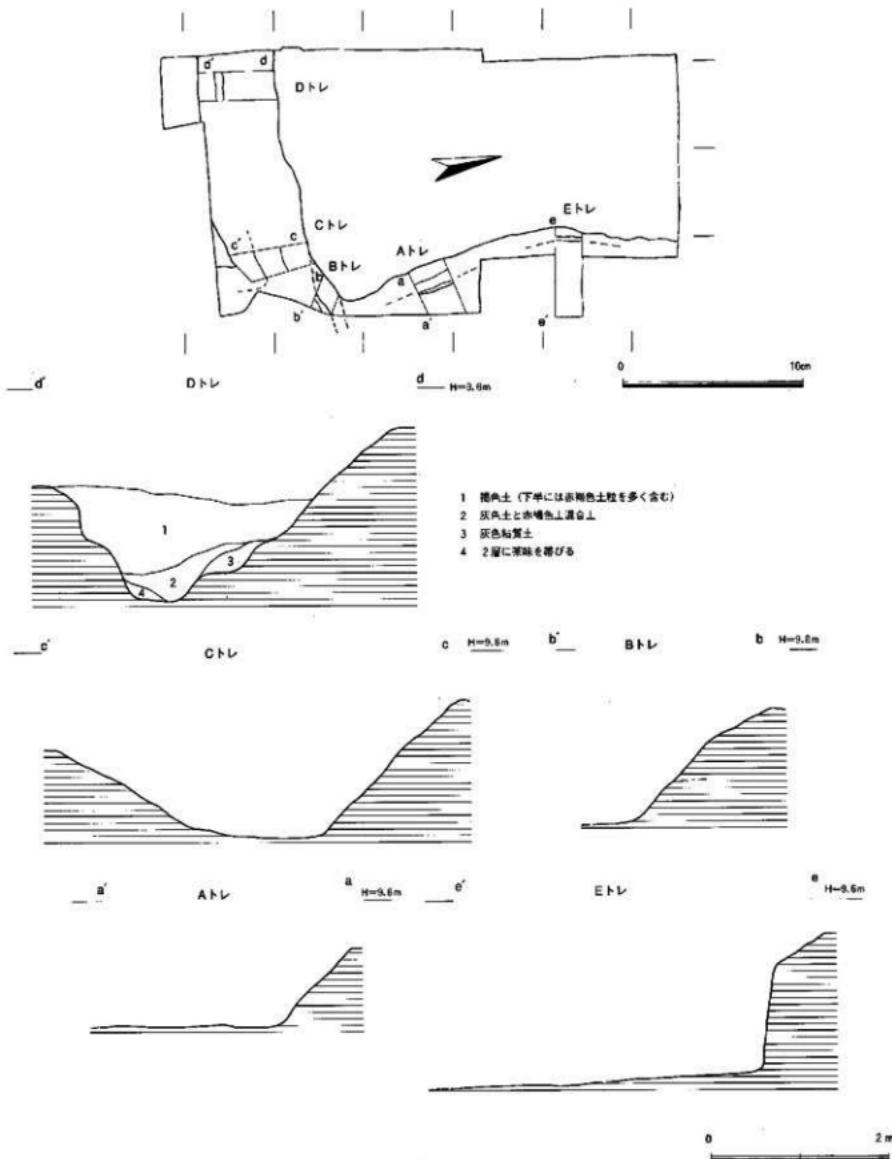
SD01 (第6図)

調査区の南側～東側にそって矩形に溝が掘削されており全体を一連のものとして検出した。溝の反対側の立ち上がりが一部調査区外にあたり掘削深も深いことからトレンチを設定して掘り下げるとした。南側はC・Dトレンチで溝幅を確認できた。溝幅4.4m深さは1.7~2.2mを測る。溝断面は箱型研状を呈し壁には向方に段がつく。また底面標高もCトレンチ内で7.4~7.5m Dトレンチ内で6.9~7.2mを測り、底面は波状となり平坦ではない。埋土は上層褐色土下層灰色土が主体となり、下層は水分を多く含みべたした塊土となっている。東側はA・Eトレンチを設定したが反対の立ち上がりを確認することができなかった。特にEトレンチでは壁が崖状に落ち込み底面は機械的に平坦面を作っている。堆土は検出面から1mが縮まりのないふかふかの褐色土で以下底面までの50cmには上層に八女粘土ブロックが多く含まれている。AトレンチもEトレンチと状況は酷似しておりこのような状況から矩形と考えていた溝の東側部分は丘陵をカットし段状に造成した結果と考えられる。

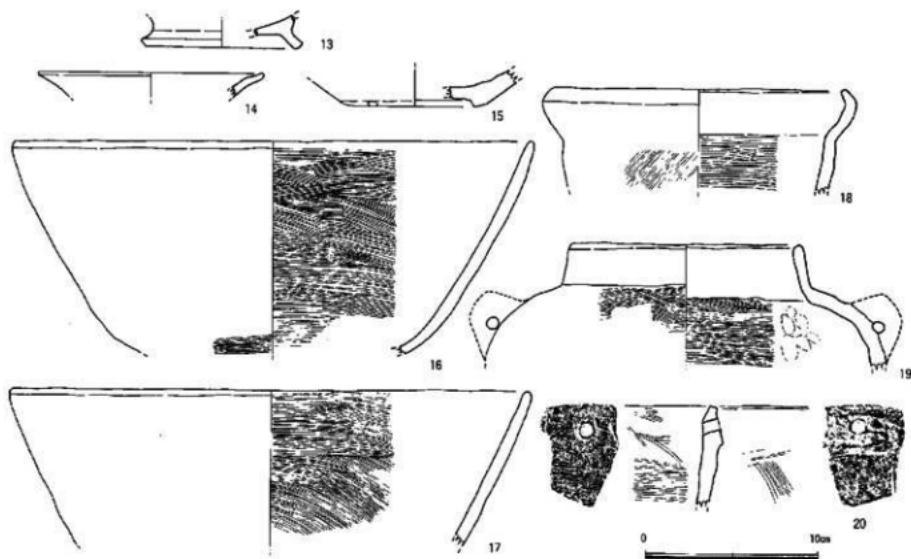
また調査区南側で確認した溝はBトレンチ内の落ち込み部分に繋がり更に東西両方向に延びるものと考えられる。また調査区南東隅では東側への落ち込みが確認されている。完掘出来ていないため段状の造成の延長部分か溝が矩形に南側に曲がるものかは不明である。出土遺物は白磁・青磁・陶器・土師器・土師質上器・須恵器のほかCトレンチからは鉄滓(製錬滓)440gが出土している。遺物はいずれも小破片で全体の明らかなものは少ないが、溝の掘削方向や形態などから調査地の西側を中心で確認されている戦国期の漆と同じものと考えられる。漆は矩形若しくは直線的に連続して中世城郭の曲輪を形づくりるものと考えられ概ね16世紀に位置づけられている。台地の東側縁辺部分までは曲輪が確認されておらず、今後この地点での該期の遺構の広がりが注目される。

出土遺物 (第7図13~20)

13はAトレンチ出土で他はCトレンチ出土遺物である。13は土師質の椀底部である。高台は高く外方に張り出している。14は白磁小破片である。釉調はやや青みを帯びた白色である。15は陶器の底部



第6図 SD01配置図及び断面図 (1/50・1/60)



第7図 山土遺物実測図2 (1/3)

である。16~18は土師質の鍋である。内面に刷毛目が残り外面には煤が付着する。18は口縁部が内湾する。19は把手部分が欠落する釜である。焼成はやや硬質であるが暗橙色を呈する。20は把手部分が欠落した上師質の釜であろうか。欠落部分の上に穿孔が行われる。

III 第186次調査

1 調査区の位置と周辺の調査

本調査区は早良区小田部3丁目285・286に所在する。有田台地の最高所から約300mほど北に下った、台地が狭くなった地点に位置し、標高約12mを測る。北側隣接地は107次と113次調査が行われ、江戸時代後半期の屋敷地と考えられる建物や溝、太平洋戦争時の防空壕が検出されている。調査区南東側の164次調査等では、東西方向の大溝が検出されている。この溝は条里に平行するもので、東から伸びてくる官道に伴うものである。本調査は佐田武雄氏による専用住宅兼共同住宅建設に伴い実施したもので、平成9年6月7日～7月4日まで行った。

2 調査の記録

(1) 調査の概要

北側隣接地の調査結果から、18世紀代の屋敷に伴う遺構群の検出が予想された。地内は現代の擾乱がひどく、その除去に時間がとられた。また全体の削平もひどく、遺構の残存状況はよくない。検出した遺構は溝状遺構と上坑である。そのほとんどは18世紀代以降のものであるが、奈良時代と考えられる溝が1条だけ検出された。

(2) 遺構と遺物

溝状遺構

SD01

調査区西側で検出した、南北方向に伸びる溝であるが、2条の溝が重複し、この内1条は奈良時代の溝と思われるが、わずかに残っている程度である。北側はSD02・SD03に切られている。幅50cm～1m、深さ10cmを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土より近世の陶磁器の他、奈良時代の須恵器・上師器などがごく少量出土した。

出土遺物（第11図）

1は陶器の碗である。高台径3.7cmを測る。高台は無釉で、体部には透明釉を施している。2は染付の碗である。胎土は灰色で、透明釉を施している。やや緑色の呉須で、外面に草花文を、見込みに寿の文字を表している。口径11.4cm、器高6.3cmを測る。

SD02

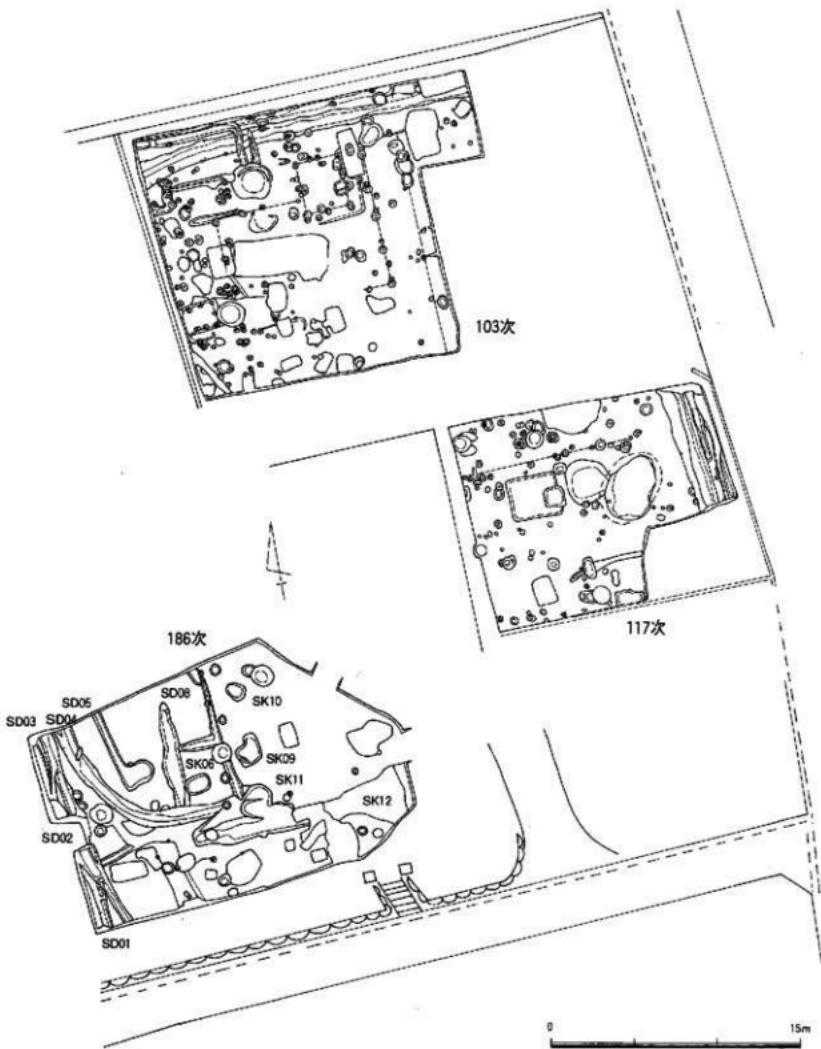
調査区西端で、東側の肩のみを検出した。深さ8cmを測る。近世陶磁器片が10点程出土した。

SD03

SD02の東側で検出した南北方向の溝で、南端で東に90°曲がり、消滅する。幅約55～75cm、深さ約20cmを測り、断面形は逆台形を呈する。近世陶磁器片・瓦片などが1袋出土した。

出土遺物（第11図）

3は染付の碗で、灰白色の透明釉を施している。呉須の呉須で、外面に草花文を描く。高台径6.4cmを測る。4は染付の皿で、高台径9.2cmを測る。盤付のみ無釉である。見込みに草花文を描き、口クロによる同心円状の細い凹みが約25条見える。釉調は3と同じ。



第8図 第186次調査周辺遺構配置図 (1/300)

SD04

SD03東側で検出した。SD03と平行に走り、東側にゆるやかに90°曲がる。SK11につながる。幅70cm~1.1m、深さ25cmを測り、断面形は逆台形を呈する。近世陶磁器片が1袋出土した。

出土遺物（第11図）

5は陶器の蓋である。胎上は赤褐色を呈し、内面は露胎で、外面に灰オリーブ色の半透明釉を施している。最大径9.6cm、器高4.3cmを測る。6は龍泉窯系の青磁の碗で、高台径7.2cmを測る。内底部は露胎で、外面に灰オリーブ色の透明釉を施している。7は青磁の盤で、口径22.8cmを測る。口唇部に白化粧を施している。

SD05

SD04の東側を平行に走り、南端が上坑状に東に折れて消滅する。幅50cm、深さ約10cmを測る。断面形は逆台形を呈し、近世陶磁器片1袋が出土した。

出土遺物（第11図）

8は陶器の小碗で、口径5.8cmを測る。外底部以外に黄白色の半透明釉を施している。外面に草と思われる絵を描いている。胎土は白色である。9は陶器の蓋で、胎上は赤褐色を呈している。内面は無釉で、外面に黒褐色の不透明釉を施している。口径9cmを測る。

SD07

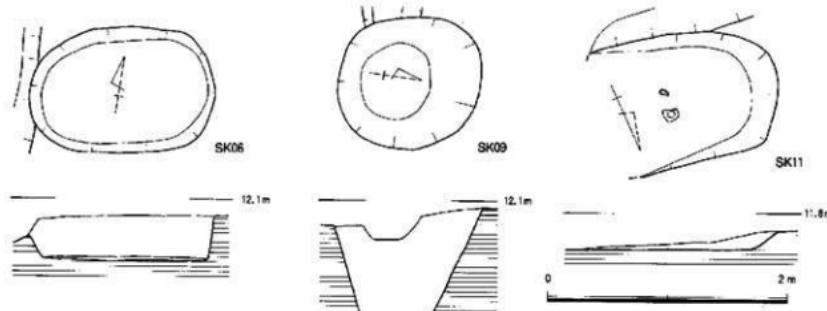
調査区西側を東西に走る。東側は現代の溝に切られる。幅35~45cm、深さ7cmで、断面形は逆台形を呈する。近世陶磁器片1袋と黒曜石1点が出土した。

出土遺物（第11図）

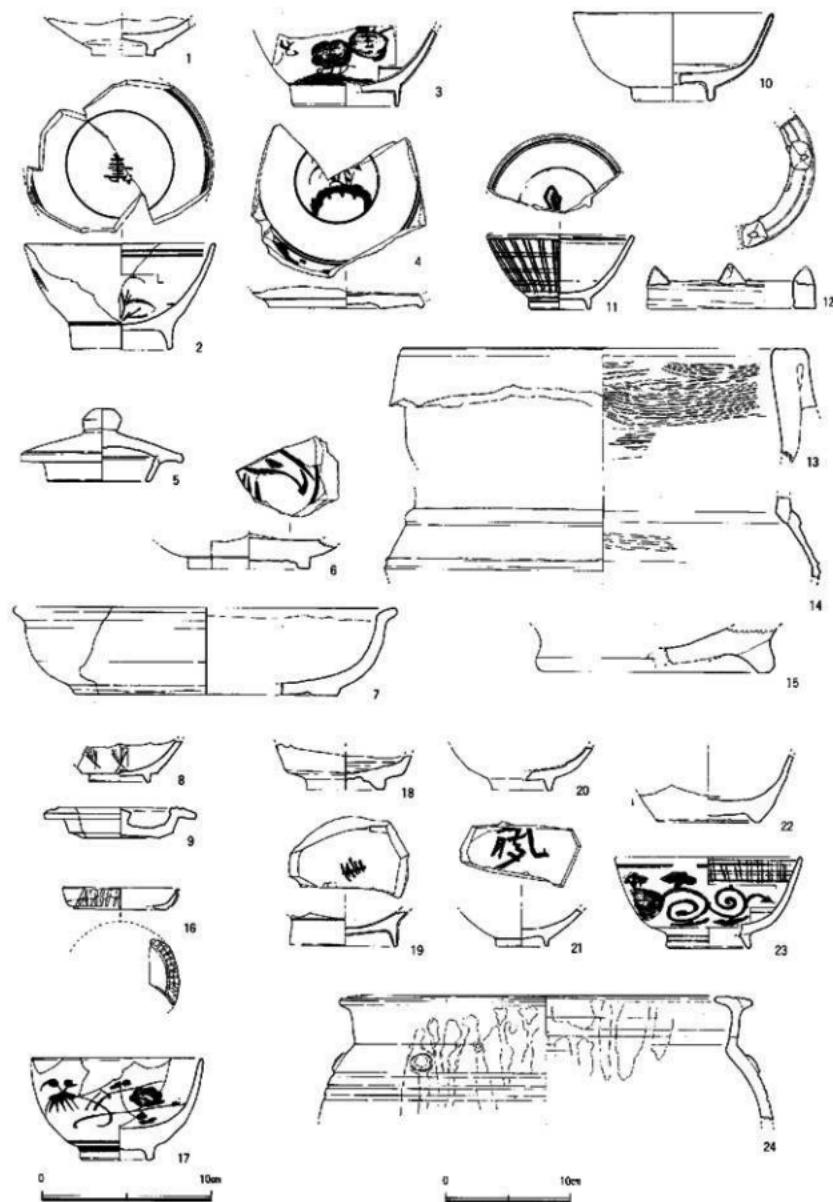
10は陶器の碗で、全面に鉄釉を施した後、見込みのみ掻きとっている。口径12cm、器高5.3cmを測る。11は染付の碗で、口径8.8cm、器高4.4cmを測る。外面に二重の格子文、見込みには花押状の文様を描いている。白色の透明釉で、胎上は白色で黒色粒を含んでいる。12は土師質のハマで、径10cm、高さ2.5cmを測る。13は土師質の火舍で、口径24.6cmを測る。外面に横ナデ、内面に横ハケを施す。14は瓦質の火舍で外面に迷続文文を施している。黒色を呈する。15は土師質の筒鉢である。高台径14.2cmを測る。

SD08

SD05東側を平行に走り、SD04に切られる。幅75cm~1.1m、深さ20cmを測り、断面形は逆台形を呈する。近世陶磁器片が4点出土した。



第9図 第186次調査土坑実測図 (1/40)



第10図 第186次調査出土遺物実測図 (1/3・1/4)

土坑**SK06 (第10図)**

調査区中央付近のSD08東側で検出した。平面形は橢円形、断面会は箱形を呈し、長さ1.53m、幅1.05m、深さ37cmを測る。近世陶磁器片1袋と鉄製鍬先1点が出土した。

SK09 (第10図)

SK06北東側で検出した。平面形は円形に近い橢円形、断面形は逆台形を呈し、径約1.1m~1.2m、深さ95cmを測る。出土遺物は陶磁器片4点である。

出土遺物 (第11図)

16は青白磁の合子で、口径7cm、器高1.3cmを測る。体部外面上半部と内面に乳白色の不透明釉を施し、他は露胎である。胎土は白色で、黒色粒を含んでいる。

SK10

調査区北東で検出した。平面形は歪んだ円形、断面形は逆台形を呈し、長さ1.37m、幅1.18m、深さ38cmを測る。近世磁器片1点が出土した。近現代の穴である可能性が強い。

SK11 (第10図)

SD04につながる上坑で、調査区中央で検出した。南側を擾乱に切られ、平面形は長方形に近い。長さ1.55m、幅1.12mを測る。断面形は逆台形で、深さ16cmを測る。近世陶磁器片が1袋出土した。

出土遺物 (第11図)

17は染付の碗で、口径15.2cm、器高6.1cmを測る。オリーブ灰色の釉で、草花文を外間に描いている。

SK12

調査区南東隅で検出した不定形の土坑で、多くを擾乱に切られている。長さは4mを超し、幅2mを超す。もっとも深いところで深さ40cmを測る。

出土遺物 (第11図)

18は陶器の碗で、外底部以外にオリーブ色の釉を施している。高台径4.6cmを測る。19は染付の碗で、高台径6.5cmを測る。全面に乳白色の半透明釉を施し、見込みに寿の字を描いている。20は陶器の小碗で、全面に褐色釉を施している。高台径3.6cmを測る。21は染付の碗で、全面に乳白色の釉を施し、見込みに字を描いている。高台径3.2cmを測る。22は染付の碗で、白色の透明釉を施している。外面に草花文を、内面上部に格子目を描いている。23は陶器の壺で、口径33.2cmを測る。両面とも赤褐色を呈し、内面に自然釉が垂れている。両面とも横ナデで仕上げている。

3 まとめ

今回検出した遺構はそのほとんどが北側の隣接調査区で検出した18世紀後半造構の屋敷に伴う遺構群と考えられる。検出した遺構は、南北方向から東西方向に曲がる溝が多く、屋敷地の南側の境界を示すものと考えられる。従って、現在ある南側の細い路地は江戸時代から存続している道と考えられる。屋敷地は南北長約60m、東西長約50mと考えられ、門構えがあることから準武士階級、つまり大庄屋敷の屋敷である可能性が考えられる。出土遺物は肥前系の他、唐津系、高取系の多くの陶磁器が出土しており、江戸時代後期の富裕農民層を考える上で貴重な資料であろう。また鎌倉期の中国製磁器が2点出土しており、今後この地区でも該期の遺構群が検出される可能性がでてきた。

VI 第187次調査

1 調査区の位置と周辺の調査

本調査区は早良区有田2丁目12-5に所在する。調査は江崎銳氏による専用住宅建設に伴って行った。現況は畑である。有台地の最高所に位置し、標高13mを測る。周辺では、第5次・77次・82次・100次・101次・134次・189次など多くの調査が行われている。弥生時代では夜臼式土器と板付式土器が出土する大型の環溝、同じく前期の小型の環溝集落が2つ検出されている。古墳時代では前期から後期に至る住居群、飛鳥時代～奈良時代では数種の橋と大型建物群が、中世末頃では城の築群が発見されている。本調査区でもこれらの遺構群が検出されている。

2 調査の記録

(1) 調査の概要

調査区内は約10cmの表土の下に造構面であるローム層がある。造構面はほぼ平坦で、擾乱もあまりないが、住居の残り具合から50cm以上は削平を受けていると考えられる。地内は昭和42年に九州大学によって北側の一部について調査が行われており、弥生時代の溝（当調査のSD01）と土坑（当調査のSK02）を発掘している。今回検出した遺構は弥生時代の溝1条と土坑1基、古墳時代の住居2軒、古代の橋1条・掘立柱建物1棟と溝1条、中世末頃の溝2条などである。

(2) 遺構と遺物

竪穴住居

SC05（第13図、図版5）

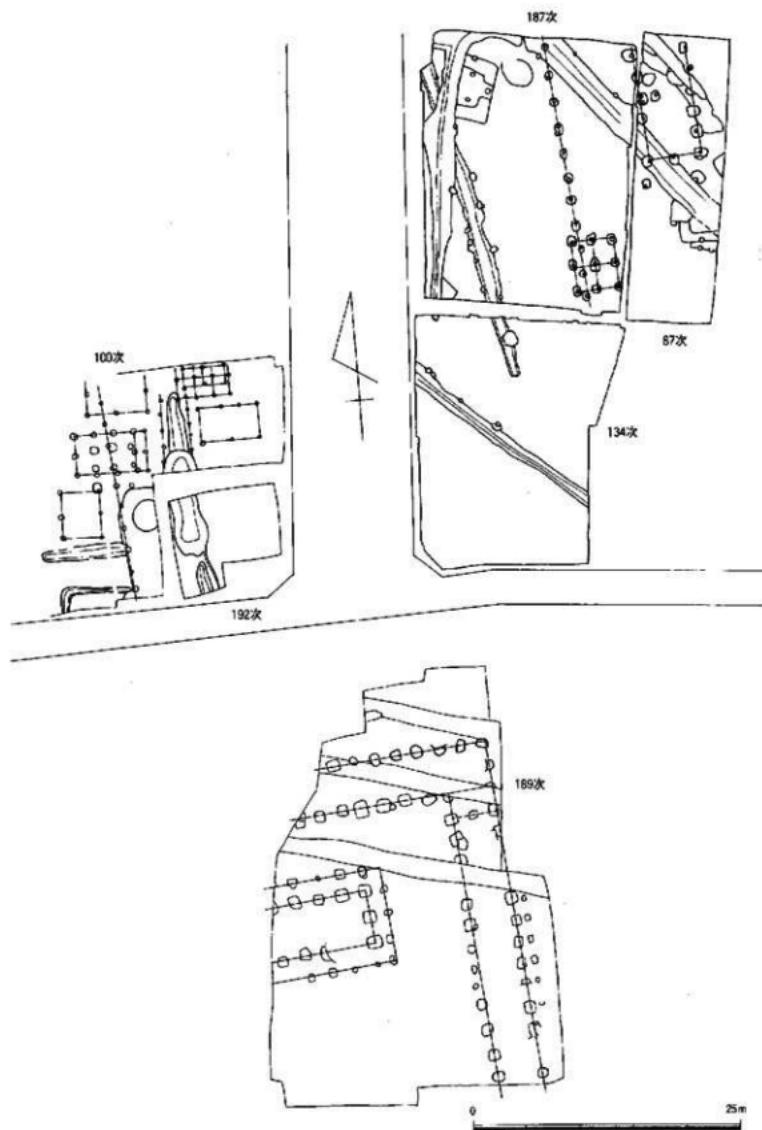
調査区北側で検出した。西側をSD03に切られている。南北長5.82mを測る。残存状況は悪く、もともと残りの良いところで、深さ15cmを測る。東壁沿いの中央付近に出入り口と思われる土坑があり、その部分を除いてベッド状遺構が回る。住居の中央付近に長径88cm、幅57cm、深さ5cmの炉跡があり、焼土・炭化物があった。柱穴は2本で、出入り口方向と直行している。径35~40cm、深さ50~55cmを測る。東壁沿いに、入り口穴付近からベッド部分にかけて、土師器壺が4個体座った状態であったが、上部の大半がなくなっていた。また南側柱穴内上部から小型丸底壺の完形品が出土しており、住居の廃棄に伴うものと考えられる。

出土遺物（第13図）

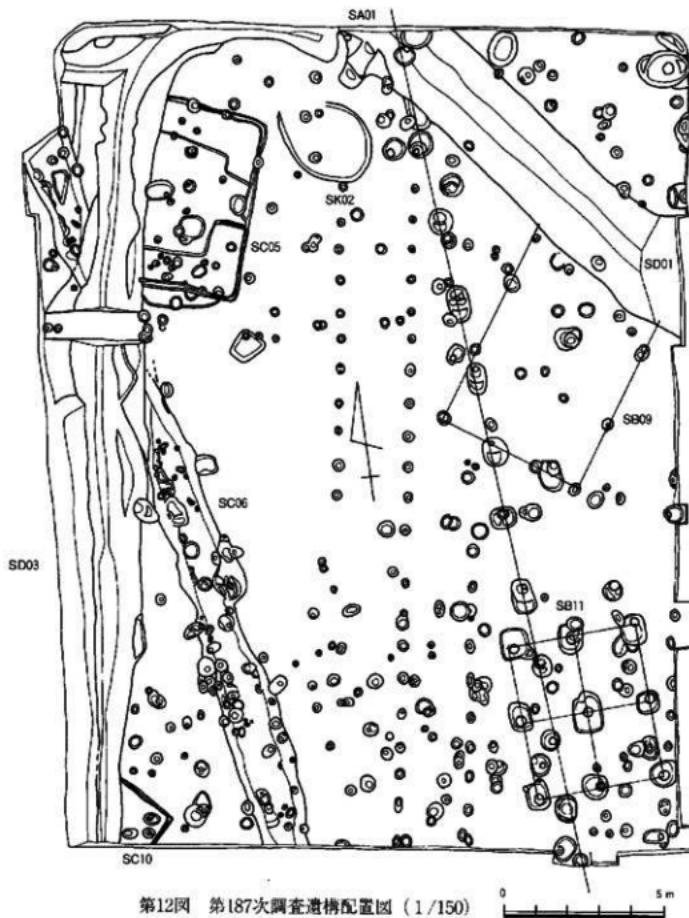
1~3は小型丸底壺である。1は口径11.7cmを測り、調整は外面がていねいなナデ、内面が横ナデのようである。2は口径13.6cm、器高10.8cmを測る。やや短かめの口縁部を持ち、胴部最大径は上部にある。3は南側主柱穴内からの出土で、均整のとれた形をしている。口径13.1cm、器高13.7cmを測る。調整はともにナデ仕上げである。4~5は土師器の壺で、4は口径15.6cm、推定器高23cm前後を測る。胴部外面には細かなハケメを施し、内面は横方向のヘケズリを施している。5はやや胴長の壺で、胴部最大径は27.1cmを測る。外面はていねいなナデ、内面は底が指ナデ、他はナデで仕上げている。外面はかなり火を受けている。胎土はともに1cm以下の石英・白色粒・金雲母などを含んでいる。

SC10（第14図、図版5）

調査区南西隅で検出した。ごく一部のみの検出のため、規模や形状はわからない。深さ5cmを測る。出土遺物は土師器の小片が少量あるだけである。



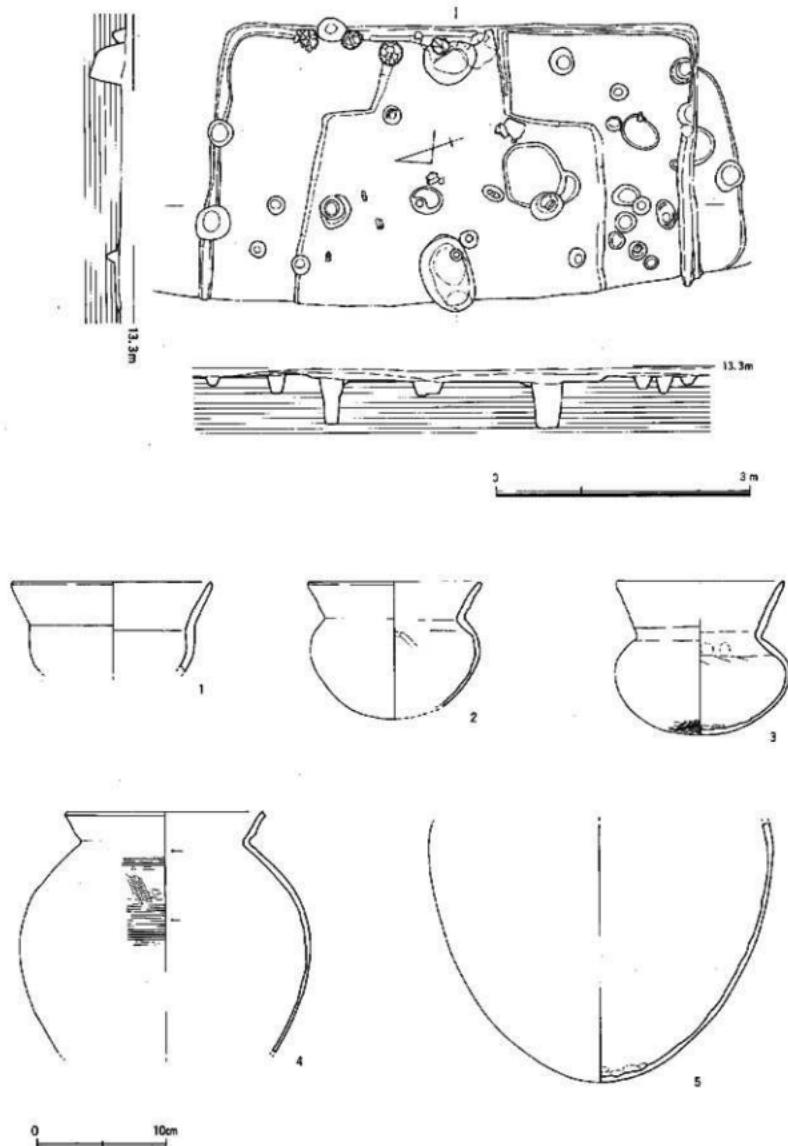
第11図 第187次調査周辺主要遺構配置図 (1/500)



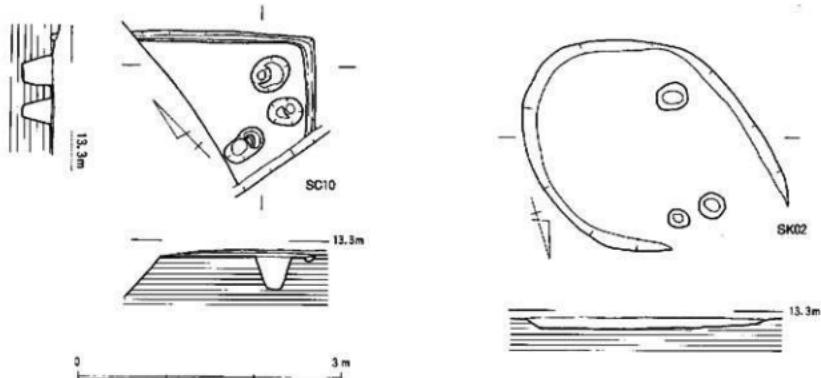
第12図 第187次調査遺構配置図 (1/150)

遺構一覧

番号	種類	長(m)	幅(m)	深(cm)	時代	その他の
01	溝	—	2.4	140	弥生時代初頭	環溝の一部
02	土坑	3.15	2.4	10	弥生時代	
03	溝	—	2.5	110	中世末	城の濠
04	(欠番)					
05	堅穴住居	5.82	—	10	古墳時代前期	
06	溝	—	1.55	60	奈良時代	郡衙の一部
07	槽	—	—	—	奈良時代	郡衙の一部、10間検出
08	(欠番)					
09	掘立柱建物	—	4.58	—	中世末	倒柱建物、2×2間以上
10	堅穴住居	—	—	5	古墳時代	
11	掘立柱建物	4.64	2.32	—	奈良時代	倒柱建物、2×2間



第13図 SC05(1/60) 及び同出土遺物実測図(1/3)



第14図 SC10・SK02実測図(1/60)

土坑 (SK)**SK02 (第14図、図版5)**

調査区北側、SD01西側で検出した。半分以上がすでに九州大学の調査時に掘られている。北側の一部は削平されている。平面形は橢円形に近く、長さ3.15m、幅2.4m、深さ10cmを測る。残存部分からは、弥生時代の遺物が出土したが、小片が多い。埋め戻し土内からは、他の時期の遺物も出土した。

樋 (SA)**SA07 (第15図、図版6)**

調査区内を南北に走る横で、柱穴を11本検出した。方位はN-4°--Wを割り、東側隣地である第87次調査で検出した大型側柱建物である1号建物の主軸とほぼ同じである。柱穴は円形または橢円形を呈し、径は57~102cm、深さ60cm前後を測る。柱痕跡は明瞭で径16~21cmを測る。柱間距離は2.2~2.64mを測る。この樋は南側隣地である第133次調査では検出しておらず、第87次調査でも確認できていない。特に第133次調査は削平が著しかったため、検出できなかったものと考えられる。

出土遺物 (第15図)

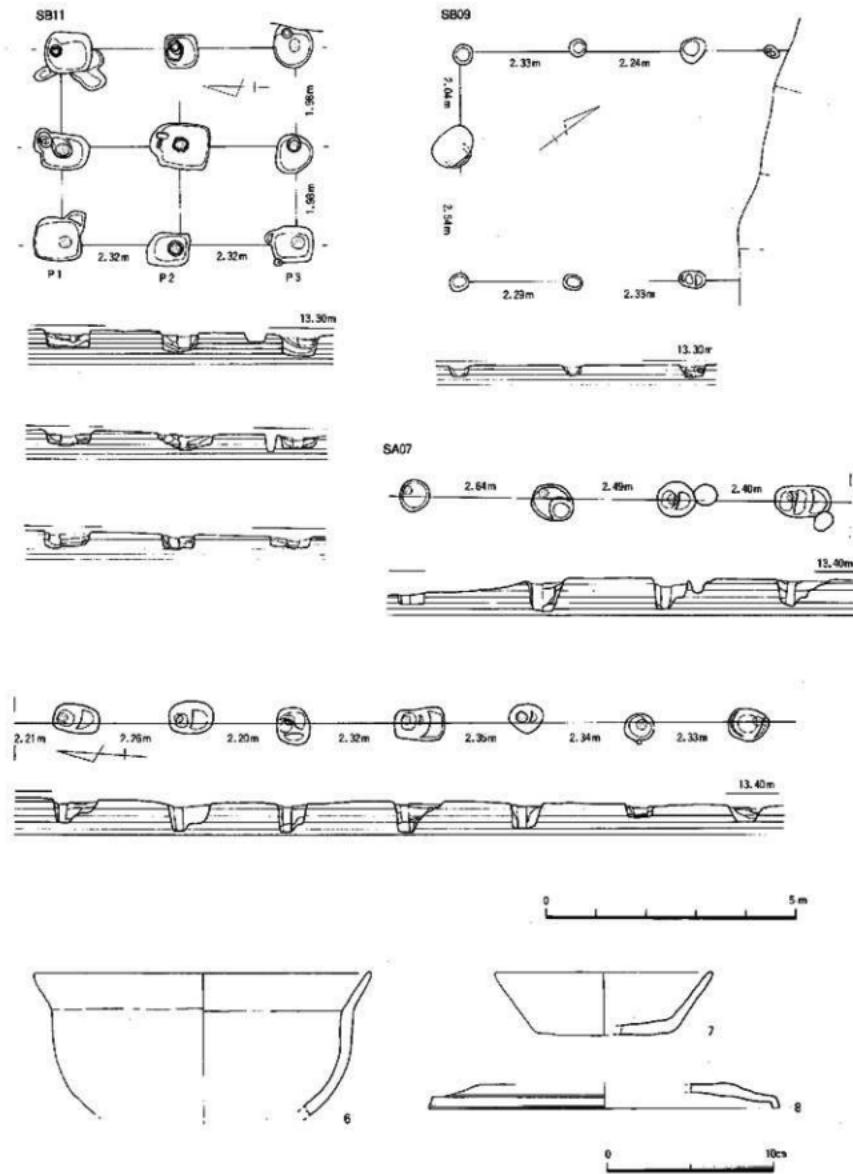
出土した遺物は弥生土器・土師器・須恵器の細片がビニール袋大1袋出土したが、時期がわかる遺物はほとんどない。6は土師器の鉢で、口径21cmを測る。両面ともナデ調整で、胎土には白色粒が多く含んでいる。ピット8の柱穴から出土した。

獨立柱建物 (SB)**SB09 (第15図、図版6)**

調査区中央付近で検出した。北側はSD01と重なっていたが、確認できなかった。梁間は2間で長さ4.58m、柱間距離は2.04~2.54mを測る。桁行は3間以上で、6.5m以上、柱間距離は2.24~2.33mを測る。柱径は34~53cmを測る。ピット内から少量の土師器・須恵器片が出土した。

SB11 (第15図、図版7)

調査区南東隅で検出した。総柱建物で、軸の延長線をぎりぎりまで掘ったが、柱は見つからず、2×2間と考えられる。SA07とだぶっているため時期は異なるが、切り合いがないため先後関係はわ



第15図 橋・掘立柱建物及び出土遺物実測図 (1/100・1/3)

からない。方位はN-2°-Wで、SA07よりやや東を向いている。桁行は長さ4.64m、柱間距離は2.32mを測る。梁間は長さ3.96mで、柱間距離は1.98mを測る。柱穴は長さ67~105cmで、中央の穴がやや大きい。深さ20~40cmを測る。柱痕跡は明瞭で、柱痕跡の直径は20~30cmを測る。明確ではないが、柱穴内の層序や柱穴の形態から、柱は抜いた可能性がある。

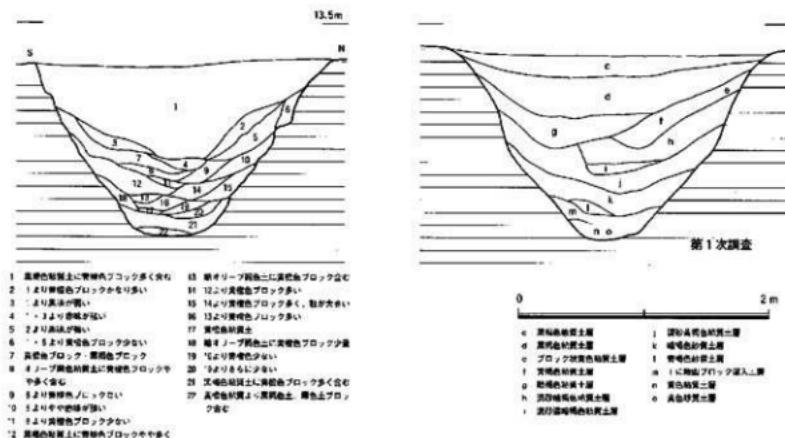
出土遺物（第15図）

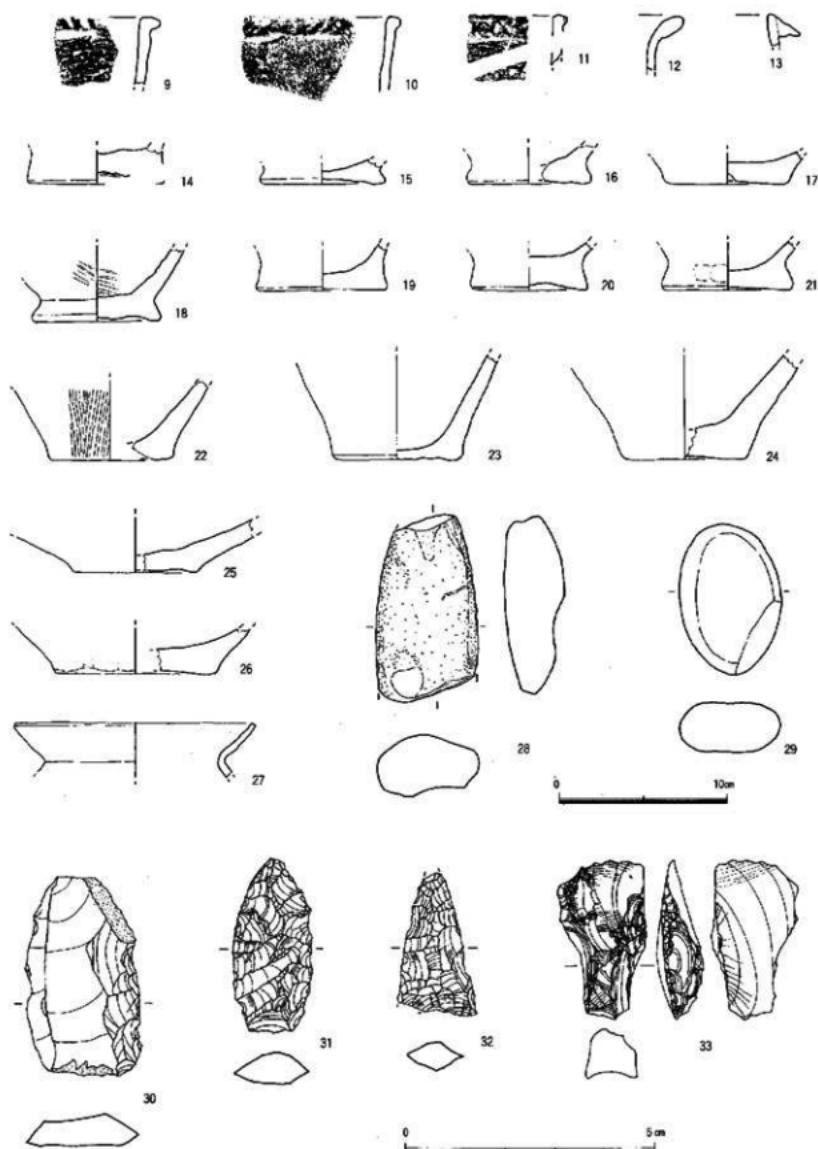
全部でビニール袋大1袋程が出土したが、細片がほとんどで、図示した2点以外は時期もわからない。7はピット3の柱痕跡から出土した、須恵器の坏である。無高台で、体部は直線的に外傾する。口径13.1cm、器高3.8cmを測る。8は須恵器の蓋で、ピット4の柱痕跡から出土した。口縁端部はく字状に折れ曲がり、口唇部は平坦を成す。口径20.9cmを測る。

溝状造構（SD）

SD01（第16図、図版7）

調査区の北側で検出した。その大部分がすでに九州大学の調査で発掘されており、残りの西側約3mの部分を発掘した。有田台地最高所付近を巡る弥生時代初頭の環溝の一部である。幅約2.4m、深さ約1.4mを測り、断面形はV字に近い台形を呈している。SC05の壁が10cm程度しか残っていないことから、50cm以上は削平されたと考えられ、復元すると幅3m、深さ2.2m以上の溝となる。上層圏は第16図のとおりであるが、堆土は大きく見ると4層に分かれる。A層は黒色土に大きな黄橙色ブロックが多く入った層（第1黒色土層）で、埋めた土と考えられる。この層はさらに細分可能であるが、明確に線が引けない点と、基本的な層の構成が同じことからあえて分離しなかった。この層は現存する溝の埋土の約半分を占めている。B層以下は自然堆積の層位で、B層は黄橙色土を主とした層（第1黄色土層）、C層は黒色土を主とした層（第2黒色層）D層は黄橙色土を主とした層（第2黄色上層）である。これらの層から、溝の1/3程度が自然に埋もれた後、人工的に一気に埋めたものと理解できる。自然堆積層部分は北側、つまり環溝の外側から主に土が流れ込んでいる。溝の掘り下げは上記の層毎に行い、A層については厚いため、1回下げる毎に出土遺物をわけた。その結果A層の最上部には須恵器や古式上師器をごく少量含んでいるが、その下からは弥生時代以前の遺物しか包含さ





第17圖 SD01出土遺物實測圖 (1/1 · 1/3)

れていない。出土した弥生時代以前の遺物は土器の小片が多く、復元できない遺物がほとんどである。

出土遺物（第17図、図版9）

出土した遺物は、上器と石器であるが、土器はいずれも細片である。総量は小コンテナ半分程度である。A層中程以下では刻目突帯文と板付式土器のみが出土し、板付式土器は最下層からも出土している。9～11はいわゆる刻目突帯文の口縁部である。いずれも口縁端部に突起を施したもので、胴部外面は粗い条痕を、内面はナデで仕上げている。1cm以下の砂粒を多く含んでいる。色調は本来橙色に近いが、煤で黒くなっている。13も壺の口縁部片で、口縁端部から右下がりに大きく張り出した突起がある。突起の断面形は直角二角形に近い。口唇部は9～11とは異なり、平坦面を成さない。色調は淡黄色で、2～3mm前後の大粒の砂粒をやや多く含んでいる。12は壺の口縁部である。口縁端部は肥厚し、急激に外反している。胎土には1～2mm大の角閃石や金雲母などを多く含んでいる。14～21は突帯文土器の壺の底部である。14は外底部にケズリの痕跡が残る。2～3mm大の石英などを多く含む。15の外底部はナデで仕上げる。1～2mm大の砂粒を多く含む。16もナデ仕上げである。17は底の上げ底は低く、ナデで仕上げている。18は底の外周を一段飛び出させており、その中は指で粗くナデしている。胴部外面には粗い条痕を施している。砂粒はあまり含まない。19は浅い上げ底で、外底部はナデ仕上げである。20は全面赤褐色を呈し、外底部は指でナデしている。あまり砂粒を含まない。21はナデ仕上げで、2～3mm大の石英などの砂粒を少量含んでいる。22～24は板付式の壺底部で、胴部外面には縱方向のハケメを施している。いずれも橙色で、1～2mm大の砂粒を多く含んでいる。25～26は壺の底部で、やや上げ底である。全面ナデで仕上げている。25は砂粒をあまり含まず、26は1～3mm大の砂粒をやや多く含んでいる。27は最上部出土の土師器壺の口縁部である。

28は磨製石斧で、折れた後に叩き石に転用している。現存の長さ11cm、幅6cm、厚さ3.6cmを測る。石材は堆積岩であるが、よくわからない。29は花崗岩製の磨石で、長さ8.9cm、幅6.2cm、厚さ2.9cmを測る。全面使用しており、中央部がやや凹む。30は黒曜石製の剥片で、下部と基部右側邊に自然面を残す。左側邊に使用痕が、右側邊に加工痕がある。長さ3.9cm、幅2.2cmを測る。31は石鎚で長さ3.4cm、幅1.5cm、厚さ0.65cmを測る。柳葉形を呈し、無茎である。黒曜石製。32は有脚の石鎚で、先端部と脚部を欠失する。現存長2.8cm、幅1.5cm、厚さ0.6cmを測る。33は台形様石器で、やや幅広の不定形剥片を素材とし、素材先端を切断後、切断面に刃溝し加工を主要剥離面から加えて左側縁を作り、右側縁は刃溝し加工を加えているが素材打点が残っている。刃部・基部は素材向側縁を残した形で台形様に仕上げている。西北九州産の良質な黒曜石を用いている。長さ3.2cm、最大幅1.7cm、基部幅0.85cm、最大厚0.9cmを測る。

SD03（第18図、図版8）

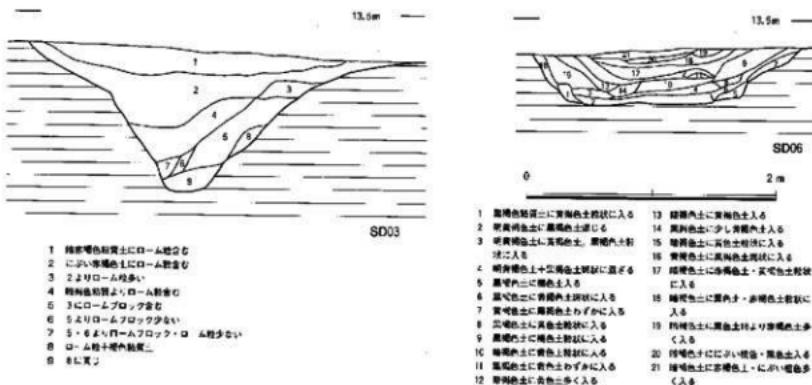
調査区西壁際で検出した。西壁際では南北方向に走っているが、調査区北壁近くで東に曲がり、その部分はしだいに浅くなつて消滅する。また調査区西壁中央付近では、西側の立ち上がりがない部分があり、西に伸びる溝が接続していると考えられる。接続部分には底からやや浮いた位置に拳大から人頭大の礫が集中しており、この部分には板碑等の遺物も多く入っていた。溝内は自然堆積で、そのほとんどが西側から流入しており、西側に土黒があった可能性が考えられる。南北方向の部分の幅約2.5m、深さ約110cmを測り、断面形はV字に近い逆台形を呈している。

出土遺物（第19～21図、図版10）

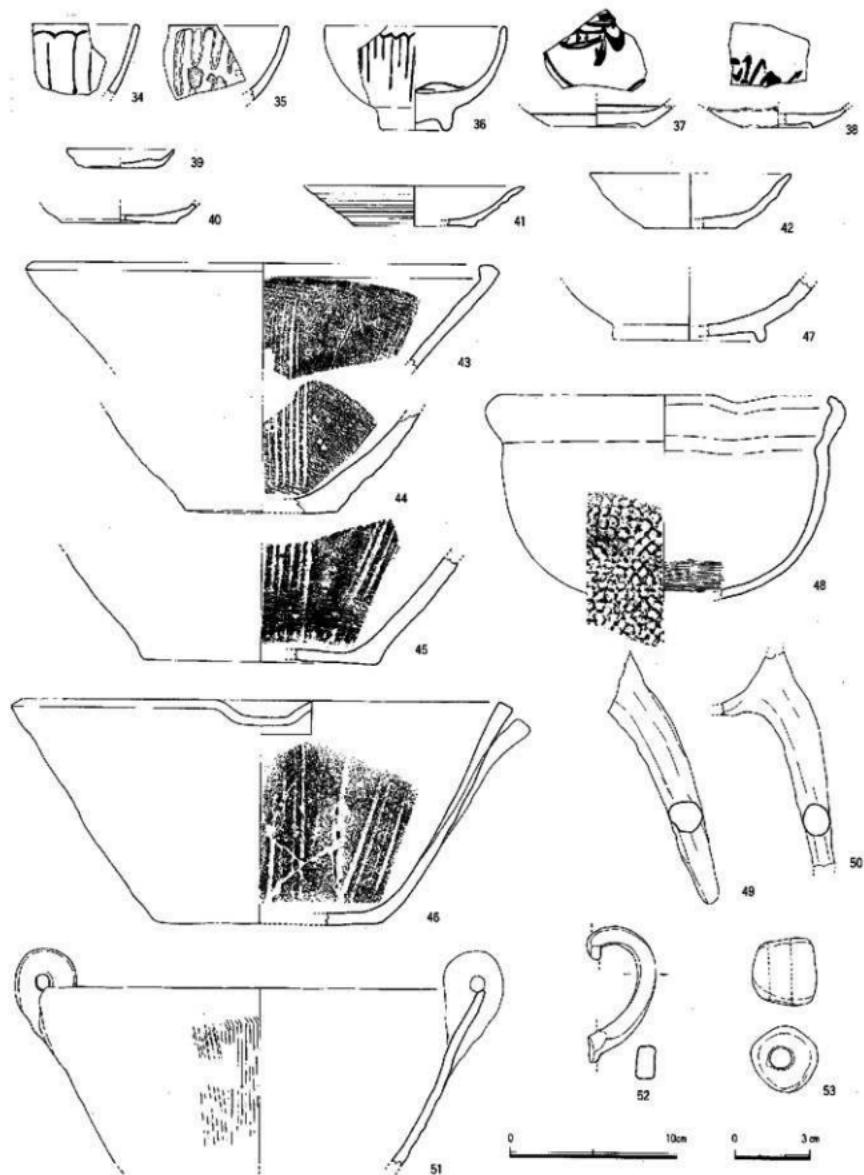
34～38は陶磁器である。34・36は青磁の碗で、外面にかなり簡略化した蓮弁を施している。34は緑灰色の釉調で、胎土は白色に黑色粒を含んでいる。35は淡緑黄色の釉調で、貫入が入っている。胎土

は、白色で黒色粒を含む。36は口径10.9cm、器高5.2cm、高台径4.4cmを測る。内面にも文様を描いている。釉調は淡緑色で、胎土は灰白色に黒色粒を含んでおり、37・38は染付で、外底部は削り出しである。見込みに花文を描いており、37は底径5.4cm、38は底径4cmを測る。ともに明染付C類である。39・40は十節器の里で、底部糸切りである。39は口径6.4cm、器高1.1cm、底径4.4cmを測る。40は底径6.9cmを測る。41・42は土師器の坏である。41は口径13.3cm、器高2.4cm、底径7.7cmを測る。外面は沈線状に全面凹凸がある。42は口径12cm、器高3.3cm、底径5.9cmを測る。摩滅が著しいが、体部外面は41と同様であったと思われる。43～46は擂鉢である。43は上師質で、口縁端部をく字状に内側に折り曲げている。口径27.9cmを測る。条線は5本である。44は須恵器の底部片で、底径9cmを測る。条線は6本である。外面はかなり凹凸が激しい。45は土師質の底部片で、底径14.1cmを測る。条線は5本である。46は土師質の片口の擂鉢で、口径29.7cm、器高13.3cm、底径13.5cmを測る。4本を一単位とする太い条線を12箇所施していると思われる。47は須恵器の鉢で、高台径9.2cmを測る。体部は厚く器厚9cmを測る。48～50は脚付き上鍋である。48は須恵質で、類例から三足あると思われる。かなり重みが大きく、口径は平均21.6cm、脚を除いた推定器高12.5cmを測る。体部下半には格子目の型押し仕様が深く残り、その部分にはススがかなり付着している。49・50は脚である。51は外耳を有する鉢形の土師質の土器で、あるいは銅鍋を模したものか。耳は2つであろう。口径26.6cmを測る。外面は縱方向のハケメ、内面はナデで仕上げている。52は須恵器の把手で、コップの把手状の形態を成している。53は土錘で、長さ2.7cm、幅1.6cm、孔径0.9cmを測る。54は火舎で、外面に2条の突帯を施し、突帯間に三重の菱形文を8cmおきに施している。55は土師質の捏体で、口径30.4cmを測る。外面はナデ、内面は横方向のハケメを施している。56は土鍋で、頸部径16.4cmを測る。胴部最大径あたりに3つを1組みとする花菱文を施している。外面はてていないナデ、内面は横方向のハケメを施している。57は瓦質の羽釜で、把手部分の径24.7cmを測る。全面横ナデ調葉で仕上げている。外面にはススが大量に付着している。

58～60は板磚で、いずれも砂岩質の石材を使っている。58は山形で、現存長18.8cm、幅14.8cm、厚さ4.9cmを測る。山形のすぐ下に沈線を2本掘り出し、その下を一段下げる梵字を彫り込んでいる。59は山形の下の部分で、梵字が遺存している。現存長11.4cm、幅15.4cm、厚さ8.3cmを測る。60は山



第18図 SD03・SD06土層断面図(1/40)



第19図 SD03出土遺物実測図1(1/3・1/2)

形で、現存長11.6cm、幅14cm、厚さ8.2cmを測る。3点とも二次焼成を受けている。61は磨製石斧であるが、磨石に転用している。現存長15.4cm、幅6.3cm、厚さ4.3cmを測る。石材不明。62は砂岩製砥石で、4面とも使用している。最も使い込んでいる1面には2本の条線があり、刃部の研磨に使っている。現存長12.3cm、最大幅5.7cm、最大厚4.6cmを測る。63は石錘で、4カ所に抉りがある。両側辺の抉りは大きいが、両端部の抉りは小さい。長さ9.3cm、幅5.6cm、厚さ1.65cmを測る。64は安山岩製の石器で、長さ4.4cm、幅2.0cm、厚さ1.2cmを測る。小型ポイントの未製品ではないかと思われる。

SD06(第18回、図版8)

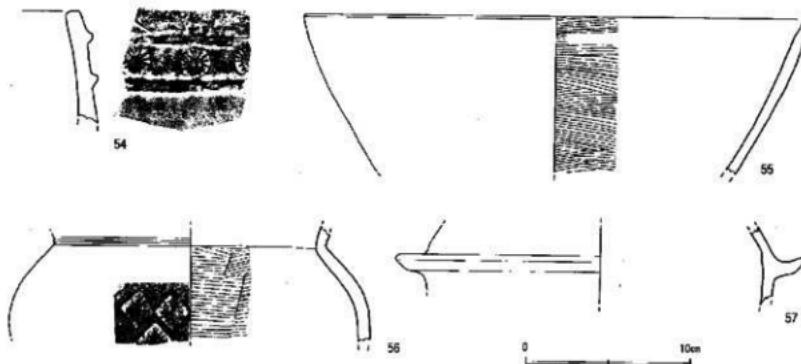
調査区を南東方向から北西方向に流れる幅1.55m、深さ約60cmの溝で、断面形は逆台形を呈している。SD03に切られている。底面は凹凸が激しく、ピット状を呈する凹みもある。また壁にもピット状の凹みが多くある。この溝は、3次や124次で検出した東西方向の大溝につながる南北方向の溝であるが、大溝から南に向かってN-3°-Wの方位で伸びた溝が、第47次と187次の間でN-10°-Wに変化し、第24回のとおり途中でわずかに曲っている。埋土はU字形の浅い層が多く、下部に亂れた層があることなどから、掘り直しがあったものと思われる。

出土遺物(第22回、図版10)

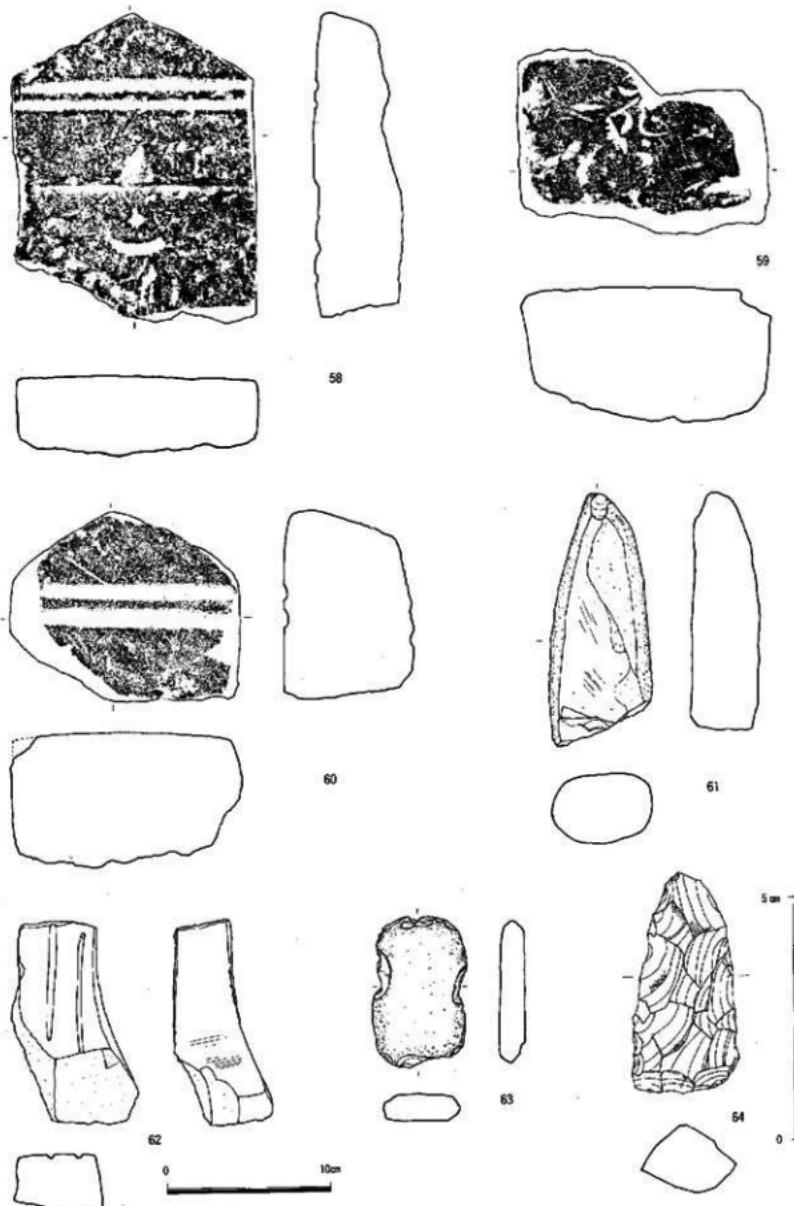
65-67は須恵器の蓋である。66・67は全体がゆるやかに彎曲し、口縁端部がく字状に折れ曲がる。66は口径14.9cm、67は口径20.2cm、器高2.5cmを測る。70-75は須恵器の坏身で、70いずれもやや短かめの体部がほぼ直線的に外傾し、口縁端部は丸みを帯びる。高台は底の端部からわずかに中に入った位置に付き、高台は外向きのもの、まっすぐなもの、内向きなものがある。70は口径12.8cm、器高3.9cm、高台径9.1cm、71は口径13.5cm、器高3.7cm、高台径8.4cm、72は口径13.6cm、器高4cm、高台径10cm、73は口径15.1cm、器高4.3cm、高台径10.3cm、74は口径17.1cm、器高4.8cm、高台径11.7cm、75は高台径11.9cmを測る。68は高坏の脚で脚端部はく子状に曲る。脚部径8.9cmを測る。69は土師器の壺で、口径16.6cmを測る。口縁部はするどく外反し、端部は尖りぎみである。両面ともナデで仕上げる。76は碗形甕で、平面形は12.7×9.9cmの略平行四辺形を呈し、厚さ約5cmを測る。木炭が付着している。77は磨製石斧の断片で、現存長12.4cm、幅7cmを測る。

ピット出土遺物(第22回)

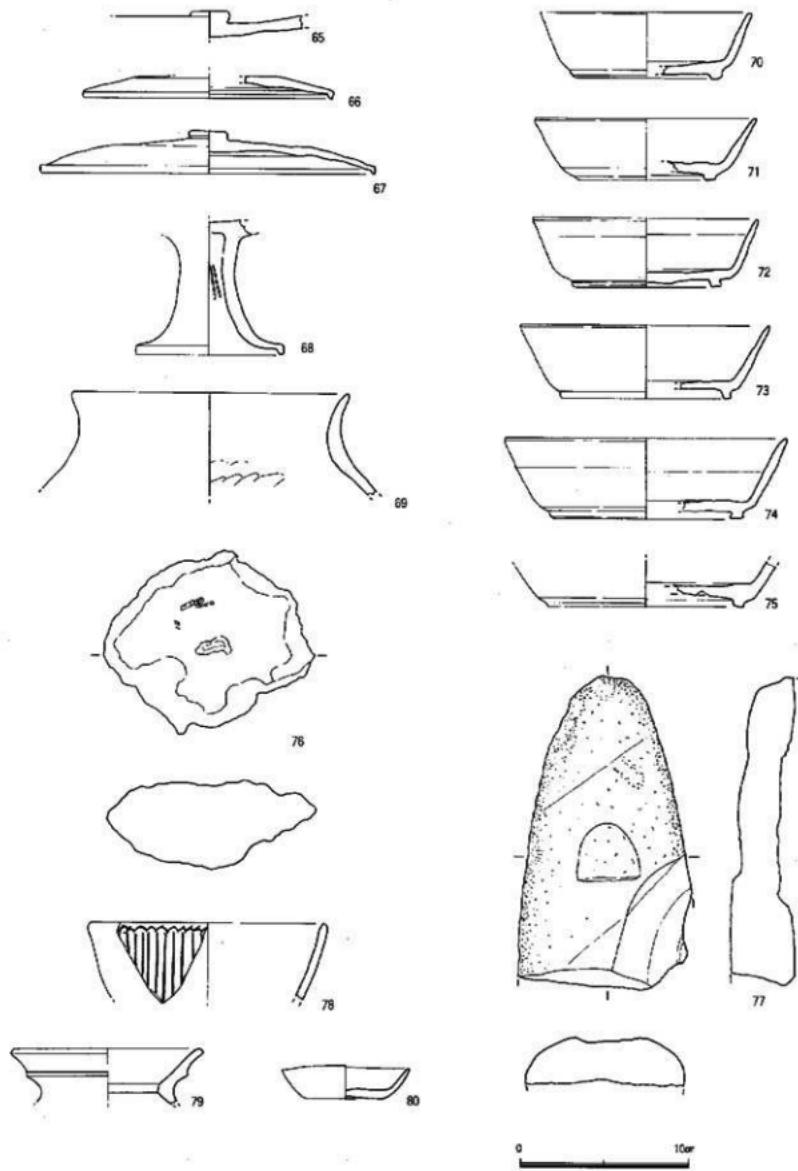
78は連弁文の青磁碗で、口径14.2cmを測る。ピット109出土。79はいわゆる二重口縁の土師器の壺で、口径11.4cmを測る。ピット140出土。80は糸切り底の土師器の皿で、口径7.2cm、器高2cm、底径4.9cmを測る。ピット180出土。



第20回 SD03出土遺物実測図2(1/3)



第21図 SD03出土遺物実測図3 (1/3・1/1)



第22図 SD06・ピット出土遺物実測図（1/3）

3 まとめ

当調査区で検出した遺構群は、大きく①弥生時代初頭の環溝 (SD01)、②古墳時代前期の住居 (SC05・10)、③古代の建物群と溝 (SA07・SB11・SD06)、④戦国時代の濠と建物 (SD03・SB09) に分けられる。以下簡単にまとめるが、このうち当調査区の中心となるのは③の古代の建物と柵である。従来から当調査区周辺で検出している大型建物群は早良郡衙の可能性が高いと見られていたが、1998年度に当調査区のすぐ南で行った189次調査で、郡庁の遺構が発見され、早良郡衙であることが確定した。郡衙関連遺構については以前筆者がまとめたことがあるが、郡庁が発見されたことから、前稿以降の調査分も含めてここでまとめたい。

① 弥生時代初頭の環溝

環溝の大半は第1次調査で発掘しており、今回はごく一部のみの調査であったため、出土遺物も少なかったが、気付いた点を列挙する。溝の最下層からは夜白系土器とともに板付式土器も数点出土しており、環溝の掘削は板付式土器の時代と言える。小片のため、I式かII式かは定かではないが、他の調査区の状況等からI式の時代と考えられる。調査区によっては夜白式土器のみが出土する地点もあるが、近年の編年では、新しい時期に属する夜白式と考えられる。溝の上部はブロック状の土で構成されており、溝は最後に人为的に埋められていると考えられる。ここも小片ばかりのため不明確ではあるが、埋めた時期は板付II式の時代の可能性がある。上部からは土師器や須恵器も出土しているが数点のみで、量的には夜白・板付式が大半で、土師器や須恵器は混ざり込みもしくは別の遺構に伴うと考えた方がいい。とすればこれだけ大きな環溝を短期間の内に廃棄した理由は何だろうか。第100次の報告書で書いたとおり、この周辺地区には板付II式の時代に掘削されたと考えられる2本の小さな環溝が存在する。この2本の環溝は古墳時代まで完全には埋まっていない。板付II式には住居や貯蔵穴などが伴うのに対し、板付I式の確実な遺構群は現在まで明らかではなく、理解を複雑にしている。今後同期の遺構の発見が待たれるところである。

② 古墳時代前期の住居

今回検出2基の住居の内、SC10はごく一部の発見のため詳細はわからない。SC05は入り口の穴を除いて、ベッドが全周するタイプで、出土した土器は布留式の新段階前後に位置すると考えられ、時期的に矛盾しない。入り口右側のベッド上に3点の臺が並んで出土し、また柱を抜いた穴に小型丸底壺を入れるなど、やや特異な土器の出土状況があるが、その意味するところは不明である。

③ 古代の建物

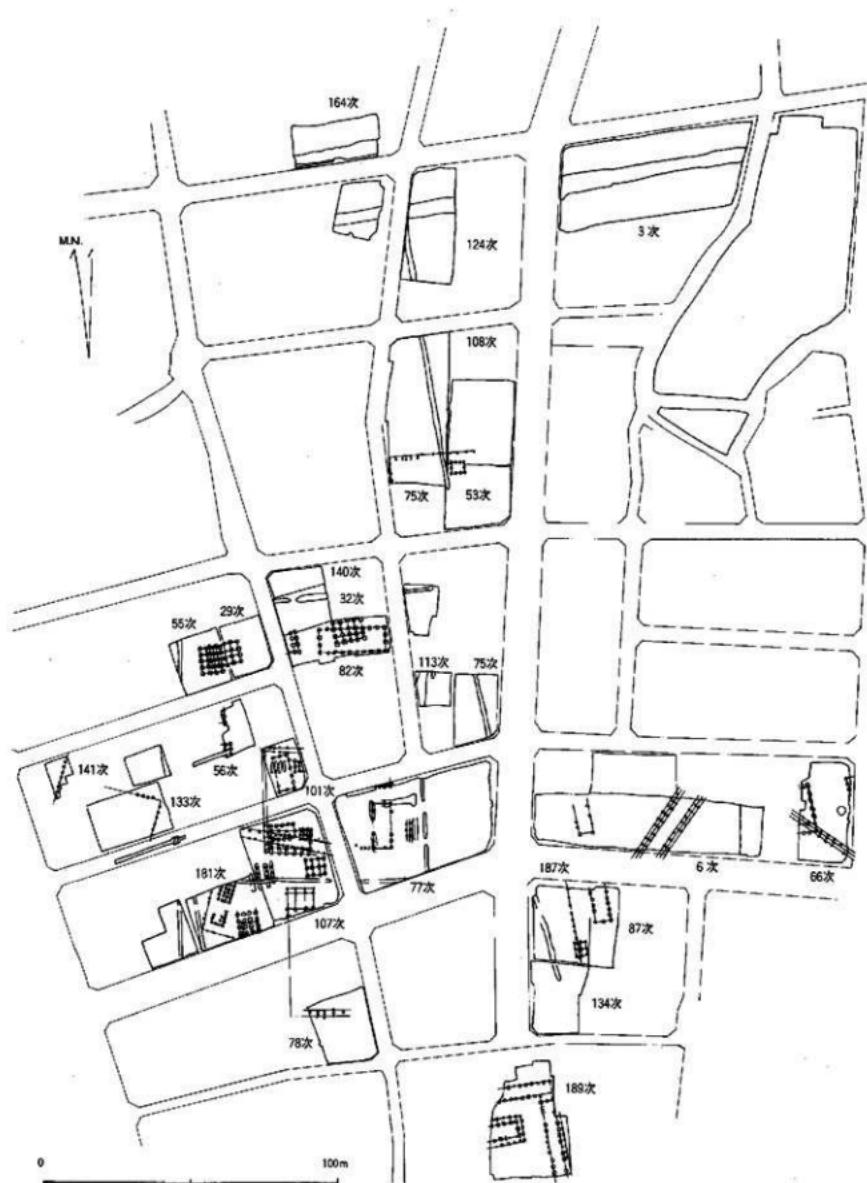
今回検出した建物は総柱建物1棟と柵1列であるが、2つは重なっており、時期が異なる。当調査区だけではこれらの遺構を理解できないため、周辺の調査区もあわせて考えたい。

前稿では古代の建物群を大きくC群とD群の2群に分け、C群をさらにC1群C2群の小群に分けたが、現在でもその分類は有効であり、その分類に従って、当調査区の遺構も含めて、検討する。

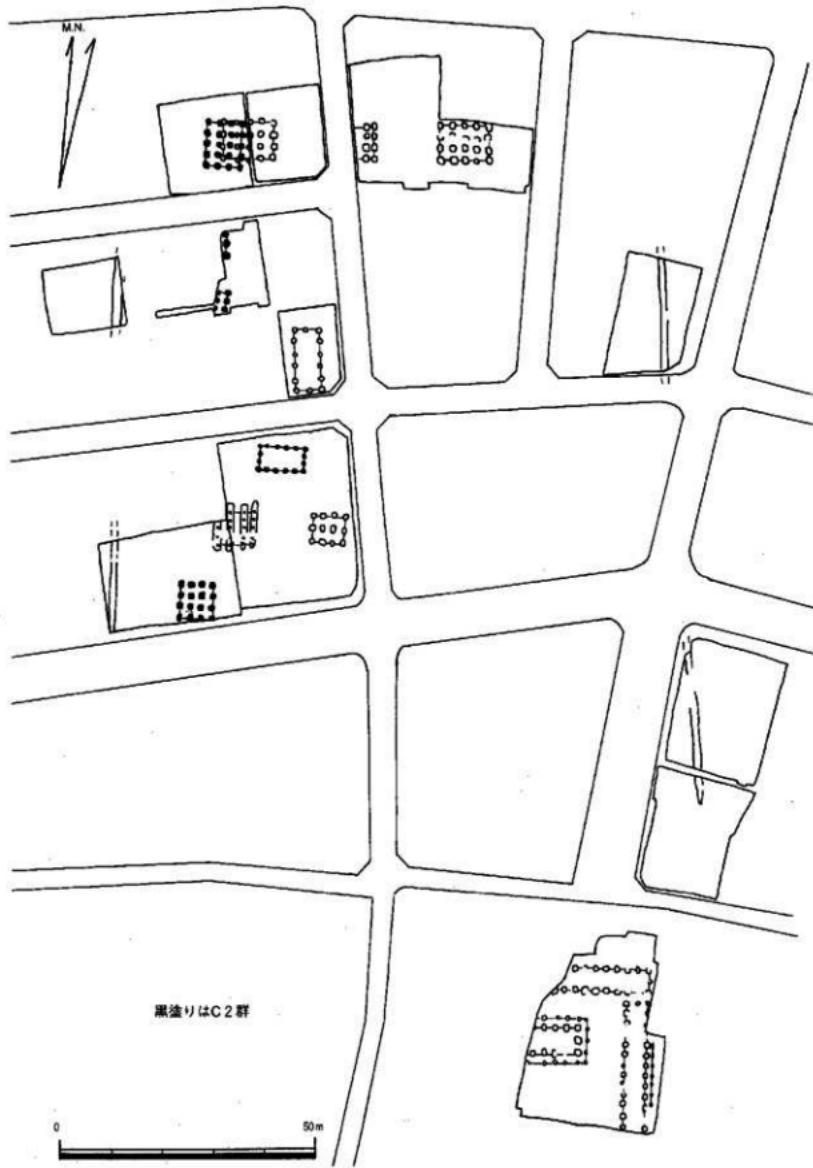
A群とB群はミヤケに関連する遺構と考えられるが、本調査区とは関係ないので簡単に述べる。

A群 台地最高所からやや西側にかけてある、1本柱の柵と総柱建物群。柵は直角あるいは平行に幾列もあるが、建物は第181次調査でしか見つかっていない。柵の配置等から2小群に分かれるかもしれない。切り合いからもっとも早い一群である。建物の柱穴からは5世紀代の陶質土器がもっとも多く出土しているが、時期的には不明な点が多い。

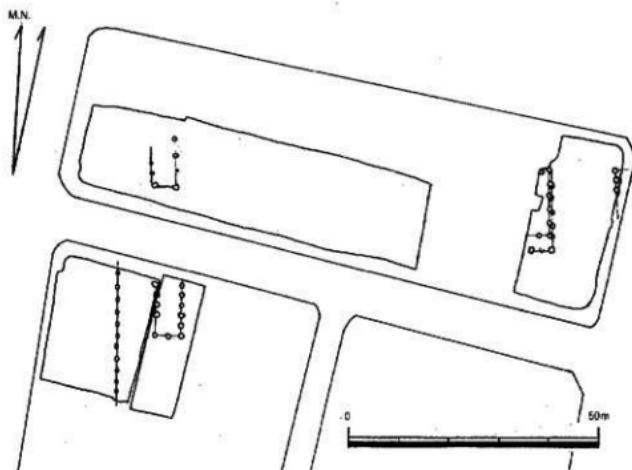
B群 一列が三本の柱からなる柵である。つまり三重の柵状を成しているが、構造についてはわか



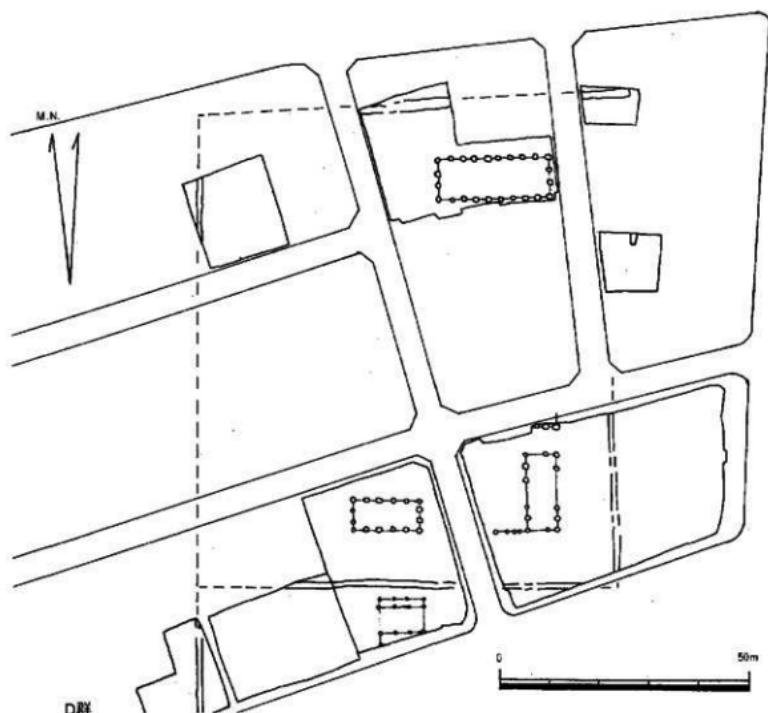
第23図 早良郡衙関連遺構配置図



第24図 早良都衙関連C1・C2群遺構配置図 (1/1000)



東方建物群



第25図 早良郡衙関連D群・東方建物群遺構配置図

らない。台地の各所にあり、現在8カ所で見つかっている。当調査区周辺では第107次から第101次調査にかけてと、第107次調査から第72次調査にかけて、それに第6次調査にもある。この地区では切り合いからA群に次ぐ時期である。3本柱構内にはやや小型の総柱建物群が並び、倉庫の数は他の地点より多い。時期的には、他の地点では6世紀末から7世紀前半頃と考えられるが、当地点の遺構は出土遺物が極めて少なく、よくわからない。

C群は早良郡衙に隣接する遺構であるが、遺構群のまとまりが、大きく2本の南北溝に挟まれた地区（西方建物群）と郡庁、東溝の東側の建物群（東方建物群）に分けられる。

西方建物群C1群 溝と建物群から成る。溝北から3°西に振れている。建物群を両側に挟むように台地を南から北に走る幅約1mの溝が2本ある。当調査区で検出したSD06はこの東側の溝である。東溝は当調査区の南側隣地である第134次で上がって消滅する。またこの溝は後述するように途中でわずかに曲っている。この2本の溝を北に下ると、東西方向の幅5mの大溝にぶつかる。この溝の北側にも同様の東西方向の大溝が走り、南側の溝は有田遺跡の東側にある原遺跡でも確認されており、この両大溝に挟まれた部分を道路と考えると、東から来る官道と考えられよう。建物群はこの両大溝の間に東西方向に大形の総柱建物群が建ち、その南側に南北方向の側柱建物が達つ。その南側にある2棟の総柱建物（内1棟は布掘建物）は前稿ではC2群と考えたが、第181次でC2群の総柱建物が検出されたのを考えると、この群に入れた方が妥当であろう。

西方建物群C2群 C1群を直角に折り返し7°前後東に主軸を振っている。総柱建物群は第55次調査から第181次調査にかけて、C1群の総柱建物をほぼ90°折り返したように建てられており、5~6棟ほどが並びうる。この倉庫群に東側には、C1群と同様に、倉庫群と直角に側柱建物が1棟検出されている。C1群で先述した倉庫2棟もあるいはこの群に入るかも知れない。両溝に挟まれた地区には現時点ではこれ以外の建物は確認されていない。

郡庁 上記の建物群の南側に郡庁が存在する。郡庁の方位はC1群とほぼ同じである。北東側の一部のみの発見のため全形は不明であるが、おそらく四面廂の側柱建物のまわりに回廊状の建物が囲んでいる。その外には構がありそうである。立て替えは現時点では確認できず、C1群とC2群の対応関係はわからない。御原郡衙である小都遺跡、御井郡衙であるヘボノキ遺跡、上毛郡衙である下大坪遺跡など福岡県内の郡庁と似てはいるが、一致しない。これらの郡庁はすべて南に入り口を持ち、北に正殿を持つことから、当遺跡も同様だとすると廟付き建物は正殿となり、正殿と周囲の回廊状建物以外に建物はない可能性が高いと考えられる。

東方建物群 東溝の東側にある建物群である。第66次と当調査区から第87次調査で検出した建物があり、平行している。この2基の建物はそれぞれ建て替えが考えられている。また第6次調査には、報告書では建物として報告されていないものの、第82次調査の建物の延長線状に大形のピットが並んでおり、建物としての把握も可能である。建物には立て替えがあり、C1群とC2群に対応しているかも知れない。

D群 4面を溝に囲まれていると考えられる側柱建物群である。ただし前稿のとおり、北側の溝には不明な点がある。溝の中には側柱建物が3棟（+1?）確認されているが、北側の第82次の建物のみ規模が大きく、この建物からは13世紀代の遺物が出土している。この周辺には同期の井戸や溝はあるものの、現時点では他に同期の人形建物ではなく、四辺の溝と建物が平行していることなどからもこの群に属する建物の可能性が強いと考えられる。四辺の溝の内、西側の溝は第188次調査で延長線が見つかり、さらに南側に伸びることが明らかとなった。周開を溝に開まれた側柱建物群は福岡県大刀洗町下高橋遺跡馬屋元地区で発見されており、時期も8世紀中頃とD群に近い。

本調査区と関連のあるC群・D群の時期は7世紀末～8世紀後半でも半ばに近い頃に押さえられ、概ねC1群が7世紀末～8世紀前半、C2群が8世紀前半、D群が8世紀半ばを中心とする時期と推察した。C1群で述べた南北方向の構からは8世紀半ば前後の上器が多く出土するが、これは本文中でも述べたように、掘り返しによる結果であると考えられる。以上から、C群は郡衙正倉、東方建物群は館ないしは御厨と考えられ、それに郡庁があることから、依然部分的ではあるが、ほぼ郡衙全体の構造が分かりはじめたといえる。

上記の点を踏まえて当調査区で検出した建物と構、溝を眺めてみると、まず本文では上げていないが、当調査区北東隅のピットは、東側隣接区である第87次調査区の大型建物の一端である。構はこの建物と平行している。構からは出土遺物が少なく、時期がわかるのは古墳時代の遺物のみで、遺物からは同時期性は確認できないものの、東方建物群の西側の境界を限る構の可能性も考えられる。ただしこの構の続きは隣接するすべての調査区で検出されていない。南側の第134次調査区は削平が著しかったためとも考えられるが、第6次・第87次は遺構の残りもよく、当調査区の構の深さから見て削平されたとは考えがたく、この構の意味合いについては留保せざるを得ない。

SB11はこの構と重なっている。方位は構よりわずかに東に振れる。出土遺物を見ると、柱痕跡からは9世紀前半頃の須恵器が出土している。ただし柱穴掘方部分には8世紀中頃までの遺物しかなく、建物の時期はこの頃かと思われる。そうすると時期的にはD群に近い時期となるが、D群の癪窓が8世紀半ばに近い後半と考えられ、この建物はその後に作られた可能性が高いと考えられる。現時点では8世紀後半の大形建物はこの地点では検出例がない。

SD06は前述のように台地を南北に走る溝で、北側の東西方向の大溝から南に伸びているが、第75次調査まではN-3°-Wの方位であるが、第75次調査から当調査区までの間にN-10°-Wの方位に変わっている。前者の方位はほぼC1群と同じである。なぜ途中で曲っているのかわからない。

以上当調査区で検出した古代の遺構を中心に簡単にまとめたが、郡庁が発見されたことで、いままで不明であった点も今後明らかになるであろう。

④ 戦国時代の遺構

有田遺跡の最高所周辺には戦国時代の城の濠群が発見されており、今回検出したSD03もその一部と考えられる。西側の第100次調査では同期と考えられる建物群も検出されている。当城の本丸は旧村落内にあると考えられ、この地区は調査が進んでないため、その詳細は不明である。今回、板碑が3点出土したが、当地区から100mの範囲に渡って濠の中から板碑が出土する。そのほとんどは小片である上、二次焼成を受けている。板碑の出土は当調査区のある台地最高所からやや北と東に下りた地点に集中しており、当調査区地点付近に墓地があったことが推察される。またそれらの板碑のほとんどは二次的に碑を受けており、あるいは戦災等による破壊等が考えられる。

当調査区で出土した三足付き土鍋（いわゆる足鍋）は周防系足鍋と呼ばれているものであるが、当調査区周辺で確認されている多くの濠を伴う城址は大友系の武将である小田郷氏の城と考えられている。生活用具と支配者は直接の関係はないのだろうか。文献上の記述と考古学的成果を照らし合わなければならぬが、今後の課題としたい。

なお本稿では菅波正人氏から多くの御教示を得たので感謝したい。

V 第190次調査

1 調査区の位置と周辺の調査

本調査区は早良区有田2丁目10-7に所在する。有田台地の最高所を東に約200m下った地点に位置しており、標高約10mを測る。東側隣接地は、本書に掲載している第182次調査が行われており、当調査区で検出した中世末頃に位置付けられる城の壕と考えられる溝の続きが検出されている。今回の調査は専用住宅建設に伴って行ったものであるが、試掘の結果、予定家屋の基礎が表土中に納まるため、本体部分について慎重工事としたが、車庫部分のみ造構面を削るために、約30m²の車庫部分のみ調査を行った。調査は平成10年8月24日～8月27日まで行った。なお調査区の位置については第182次調査の第2図を参照していただきたい。

2 調査の記録

(1) 調査の概要

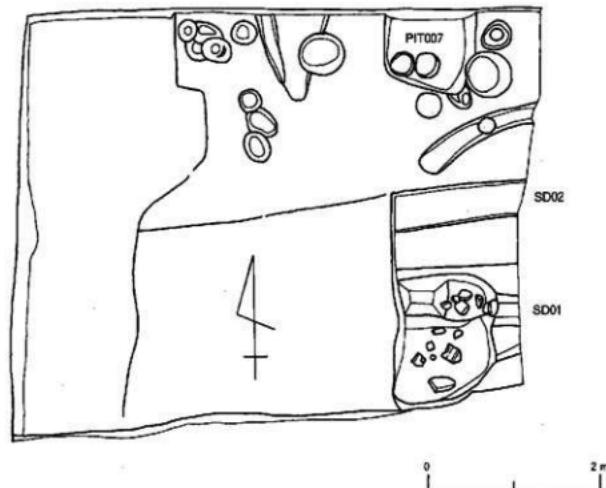
調査の結果、182次調査区から続く溝1条と、それより新しい時期の矩形の溝1条、住居址の可能性のある部分1箇所が検出された。小面積の調査のため、濠は一部のみを掘削した。

(2) 造構と遺物

溝 (SD)

SD001 (第27図、図版11)

第182次から続く溝である。調査区東壁の断面では、全体は台形を呈し、中央部のみ深くなっている。その西側から全体が一段下がっており、その部分には板碑などの遺物が多くあった。推定の幅約4.5m、深さ約2mを測る。埋土は自然堆積で、主に北側から土が流入している。



第26図 第190次調査遺構配置図 (1/50)

出土遺物（第28図、図版11）

1・2は弥生土器の壺である。ともに断面L字の口縁部片である。3は須恵器の壺身の口縁部片である。4は須恵器の高台付坏で、高台は端部のやや内側に付く。5は越州窯青磁の碗で、底径7.9cmを測る。6は須恵器の大壺の口縁部片で、口縁端部直下に波状文と櫛状施文具による連續の刺突文を施している。7は瓦器碗で、高台は丸みを帯び、高台径7cmを測る。8は須恵質の擂鉢で、条線は7本以上と多い。9は瓦質の擂鉢もしくは捏鉢と思われる。口縁端部をく字状に折り返し、内面と口縁部外面は横ナデで仕上げている。10は染付の碗で、高台径4.4cmを測る。胎土は白色で黑色粒を含み、呉須は緑色に近い。11は脚付き土鍋の脚部で、瓦質である。体部から脚部に向けて削って仕上げている。12は土師質の羽釜である。丸い体部上半部に直立する短い口縁部が着き、体部中央に全周する突起が付く。体部上半部中央に把手があり、把手は2箇所と思われる。外面にはほぼ全面、内面は口縁部にススが付き、頸部内面直下にはコゲが多く残っている。内面と体部下半はハケメ、体部上半部はナデで仕上げている。14と15は板磚の山形部である。14は現存長29.2cm、幅17.8cm、厚さ11cm、15は現存長23.3cm、幅18cm、厚さ11cmを測る。いずれも山形の下に2条の線刻を施し、その下6cm前後の所を一段低くして、梵字を刻んでいる。ともに砂岩質で、二次焼成を受けている。

SD002（第27図）

SD001を切る溝で、断面は箱形を呈する。幅1.33m、深さ1.83mを測る。遺物はほとんど出土していないなく、新しい時期の所産と考えられる。

ピット007

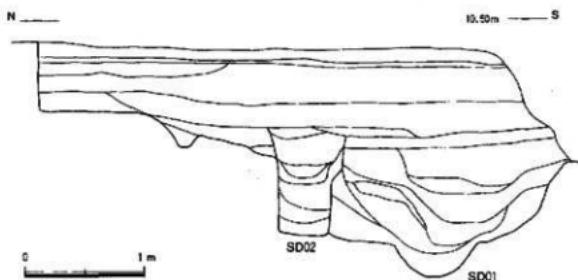
方形を呈する長さ1m近い方形の穴であるが、この部分を調査区壁面の断面で確認すると、浅い住居址状を呈しており、それに伴う穴の可能性があるが、残りが悪くよくわからなかった。007の穴全体は長さ107cm、深さ72cmを測る。

出土遺物（第28図）

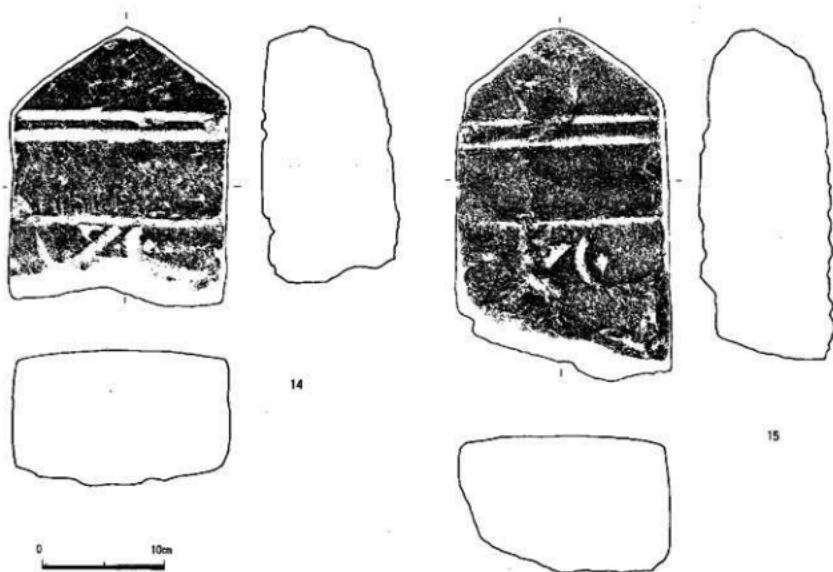
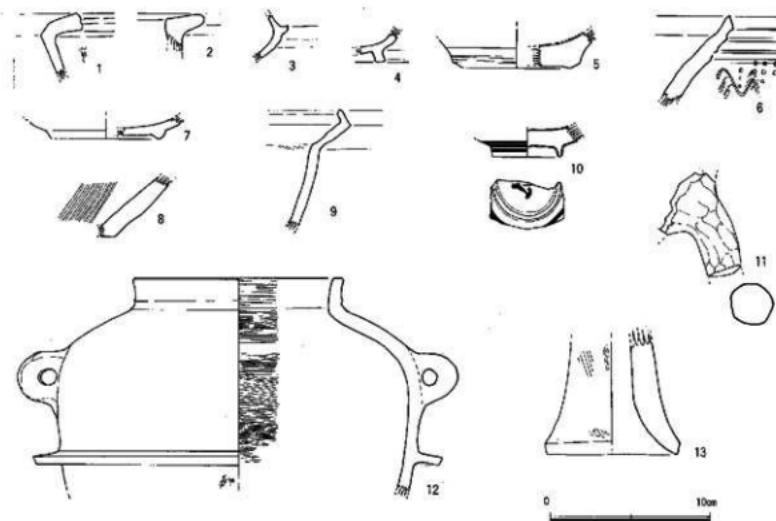
13は弥生土器の器台で、底径8cmを測る。器壁は1cmを越える。

3 まとめ

当調査区は極端に狭かったため、SD001以外の状況は良く分からなかった。調査区北東側には包含層状の層があったが、断面観察では住居の可能性が高いと考えられるが、不明である。またSD001も危険防止のため、一部しか掘れなかつたが、板磚3点など狭い割には出土遺物は多かつた。



第27図 第190次調査区東壁土層断面図（1/40）



第28図 第190次調査出土遺物実測図（1/3・1/4）

VI 第192次調査

1 調査区の位置と周辺の調査

当調査区は早良区有田2丁目13番3号に所在する。周辺は有田台地の最高所にあたり、標高は13m程度である。個人住宅の建設に伴い、1999年5月10日から5月19日までの10日間発掘調査を行った。対象面積は136m²、そして実際の調査面積は73m²である。

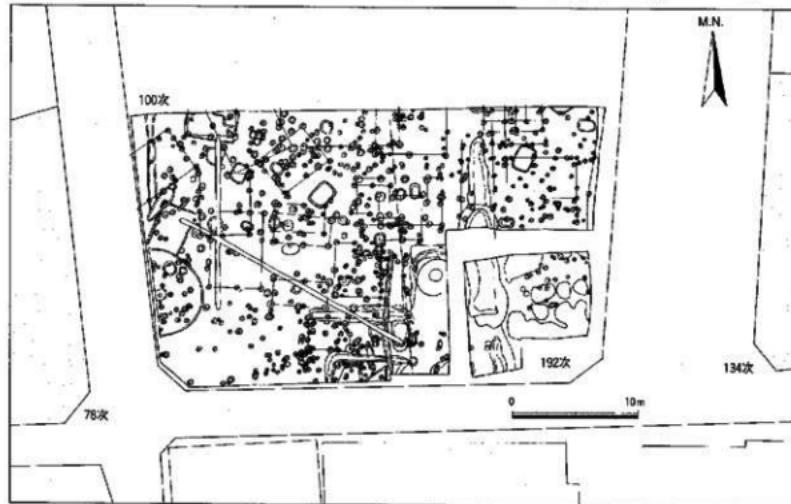
周辺では78次、100次、134次といった数多くの調査が行われている（第29図）。特に当調査区は100次調査では調査対象外であった南東部分の一角に相当し、100次調査における遺構の広がりをみると上でも注目される。

2 調査の記録

(1) 調査の概要

当調査区の遺構面は橙色ローム（鳥栖ローム）で、現地表下30cm程度で検出した。多くの搅乱を受けしており、遺構の遺存状況は決して良好と呼べるものではなかったが、溝状遺構2本とピット群を検出することができた。溝状遺構は調査区西側に存在し、南北方向に走るもので、いずれも中世城（小田部城）に作られた溝状遺構の一部と考えられる（後述）。調査区東側には搅乱を免れた部分にいくつかピットが存在する。中には柱痕跡を有するものがあるが、そのあり方からは有意な配列を看ることはできない。なお、ピットからは土師質の上器の細片が一点出土したのみであり、このピット群の所属時期は不明である。

遺構の遺存状況が良くなかったためか、遺物の量は総じて少なく、パンケース1/4に満たない。以下では、当調査における主要な遺構である溝状遺構について、その概要と出土遺物について述べる。



第29図 第192次調査周辺遺構配置図 (1/400)

(2) 遺構と遺物

溝状遺構

SD01 (第30図、図版12)

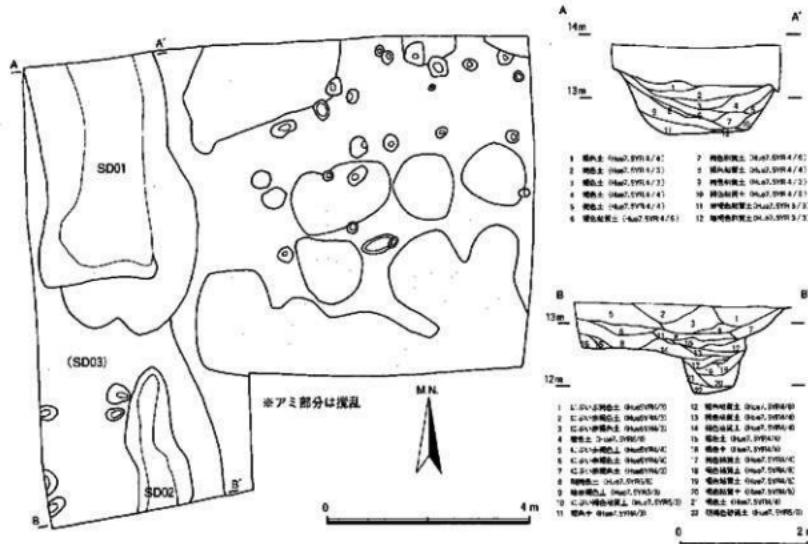
調査区北西側で検出した。現状では幅2.5m、深さ1.1mで、傾斜の緩やかな断面逆台形を呈する。上部は削平を受けているため、東側の肩部分が西側に比して20cm程低い。底部の幅は1.5mで、後述するSD02に比してかなり幅広となっている。調査区内では溝は長さ5.6m程で収束し、南端部分ではかなり緩やかな立ちあがりとなる。

出土遺物 (第31図)

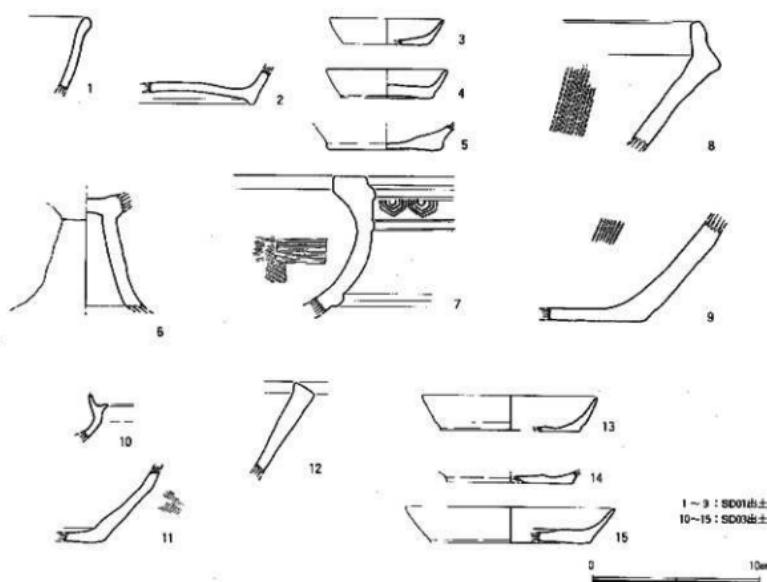
1は龍泉窯系青磁枕の口縁部片。3～5は土師皿で、底部には糸切りによる痕跡が残る。図はいずれも復元によるもので、3、4はそれぞれ口径6.8cm、7.5cmを測る。6は土師器高杯の脚部。7は火鉢で口縁部に巡らした2突帯間にスタンプ文を配する。8、9は備前焼の擂鉢で、同一固体になるものと考えられる。

SD02 (第30図、図版12)

調査区南西側で検出した。現状では幅1.0m、深さ0.9m程のものであるが、100次調査の所見も含めた全体をみる限り、SD02は2段に掘り進められた溝の最深部に相当し、溝本来の肩部はSD02の東側0.6mにみられる落ち込み部分に想定することができる。これをSD03と呼んでおく。したがってSD03西側の肩部は当調査区外に存在することになり、100次調査時における所見を考慮すれば、SD03の幅は8～9m程とみることができよう。SD03の立ちあがりは比較的なだらかであるが、SD02においてはかなりの急角度となる。SD02の肩部は東側が高く、約30cmのレベル差があるが、溝内における埋土の状況をみると、これは削平その他によるものではなく、掘削時本来の形を留めているものと



第30図 第192次調査遺構配置図 (1/100・1/80)



第31図 第192次調査出土遺物（1/3）

考えることができる。

出土遺物（第31図）

10は須恵器杯身でTK217型式に相当する。11、12は瓦質上器。13～15は十師皿で、図はいずれも復元によるものである。底部には糸切り痕が残る。13、15はそれぞれ口径10.4cm、12.5cm。

3 まとめ

当次調査の成果としては、100次調査時において、中世後半代（16世紀前半）のものとされた漆状遺構の続きを検出したことが挙げられよう。100次調査時における9号溝がSD01に、5号溝がSD03にそれぞれ相当し、5号溝は100次調査時の所見として、中世城に伴う漆状遺構と報告されていた。土層の状況をみる限り、SD02はSD03（漆状遺構）が機能している段階、つまり埋没する以前に掘り込まれていたことは明らかであり、漆自体がSD02のような一部深掘部分を有していたと考えることができる。また同方向に延びるSD01もこの漆状遺構の一部を構成するものとして機能していた可能性もある。

VII 第193次調査

1 調査区の位置と周辺の調査

当調査区は早良区小田部1丁目393に所在する。調査地の標高は7m程度で、東側30mの地点には將軍神社がある。近隣の調査例としては、北30mの地点には127次調査、南へ100m程の所には34次、160次調査などが行われている（第32図、図版12）。また將軍神社の敷地内では有田2号墳の存在が確認されている。

発掘調査は個人住宅建設に伴い、1999年6月14日から16日までの計3日間行った。調査対象地が駐車場部分と限られていたため、調査面積は8.7m²と極めて狭い。また重機の搬入も困難であったため、人力による表土除去および埋め戻しという調査となった。

2 調査の記録

当調査区の遺構面は橙色ロームで、現地表下60cmの所で検出した。層序は4つに分かれ、1層目は30cmの黄土、2層目は10cm程の青灰色粘質土で、3層目は暗褐色粘質土、4層目が橙色のローム層となる。第3層は遺物包含層で、中へ近世頃の遺物を若干含む。いずれも細片ばかりで図化に堪えるものではない。遺構としては、擾乱を除けば溝状遺構1、ピット2を数えるに過ぎない（第32図、図版12）。いずれの遺構も遺物を伴わず、その所属時期は不明である。



第32図 第193次調査位置図 (1/1200)



第33図 第193次調査遺構配図 (1/100)

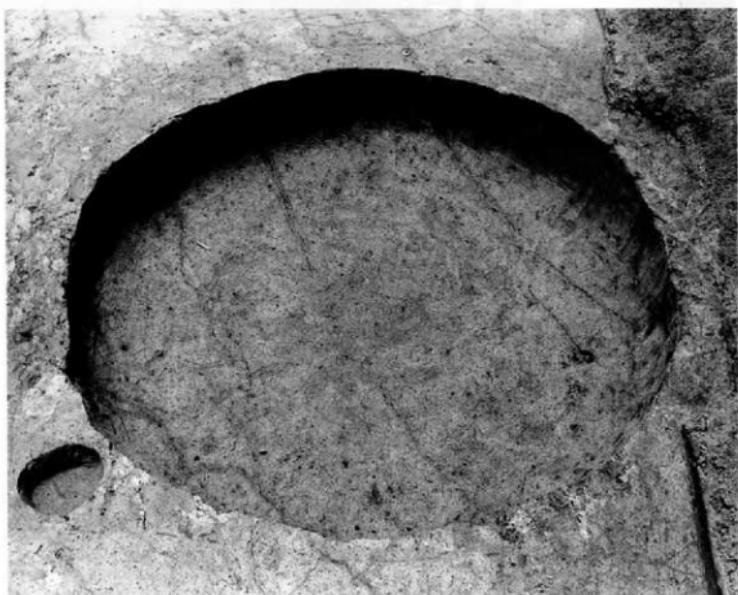
図版1



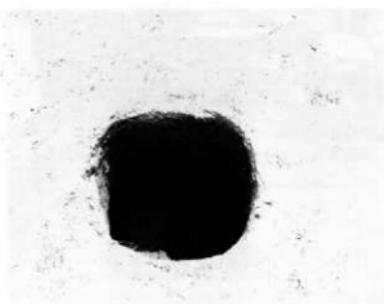
1 第182次調査北半全景（南から）



2 第182次調査北半全景（北から）



1 SK01 (北から)



2 SE01 (北から)

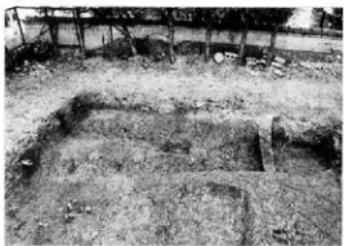


3 SD01E トレンチ (南から)

図版 3



1 第186次調査全景（北東から）



2 調査区南西側



3 調査区北東側



4 SK011



5 調査区南東側



1 第187次調査区北半全景



2 第187次調査区南半全景

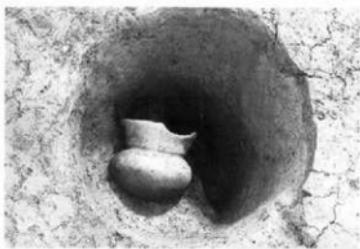
図版5



1 SC05



2 SC05遺物出土状況



3 SC05遺物出土状況



4 SC09



5 SK02



1 SA05



2 同左柱穴



3 同左柱穴



4 SB07

図版7



1 SB11



2 同上柱穴



3 同上柱穴



4 SD01



5 SD01土層



1 SD03 · 06



2 SD03土層



3 同遺物出土状況

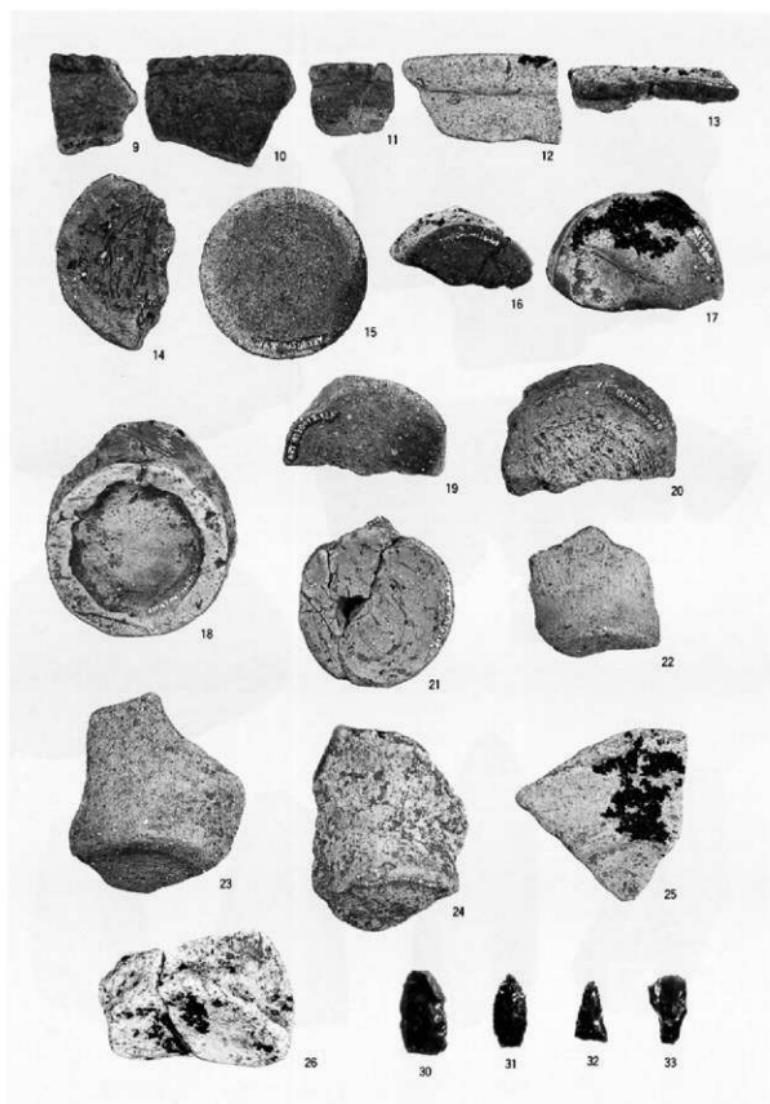


4 SD03 · 06

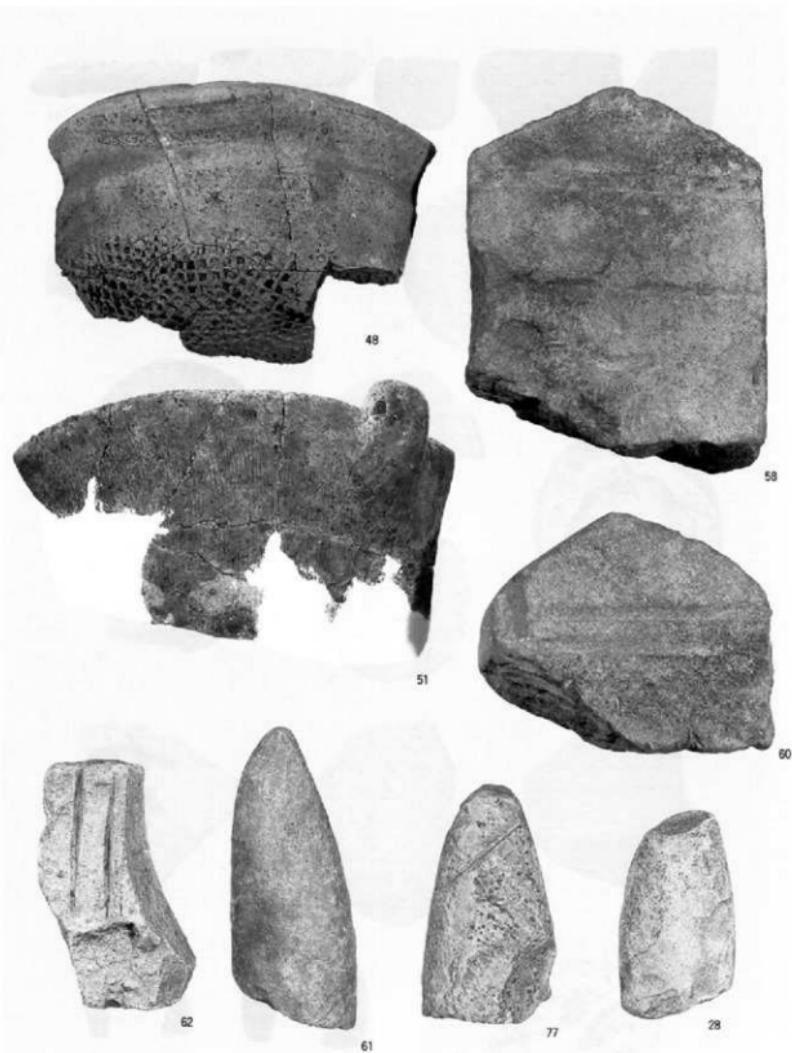


5 SD06土層

図版 9



SD01出土遺物

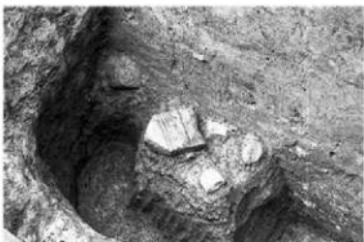


SD01 · 03 · 06出土遺物

図版11



1 第190次調査全景



2 SD01遺物出土状況



3 SD01・02土層断面



4 遺物15



5 遺物14



- 1 第192次調査SD01（南より）
- 2 第192次調査SD02（北より）
- 3 第192次調査全景（南より）
- 4 第193次調査全景（南東より）

有田・小田部35

福岡市埋蔵文化財調査報告書第657集

2000年3月31日発行

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1

印 刷 (株)ドミックス・コーポレーション